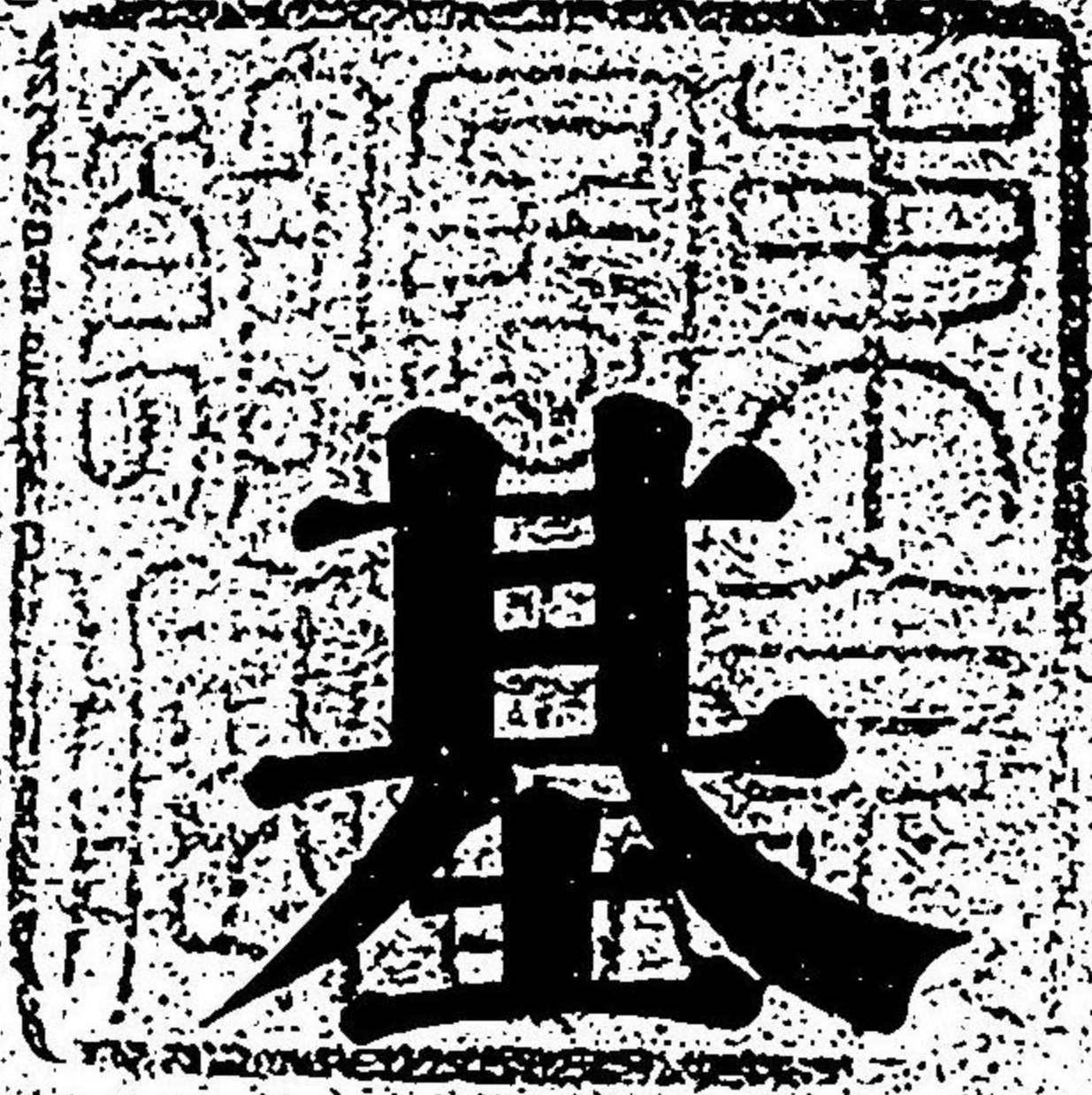


70-163



基督傳記



基督傳記序

基督教は哲學も非ざ又道德教訓もあらざ生命かり能力かり而して其生命能力たる凡て完全の模範神人一身の人物キリストもありて存す故もキリスト教を學ばんと欲する者ハ先づキリストを學ばざる可らざキリスト曰く我も從へ又曰く我も學へ眞も至言と云ふべし而してキリストを學ぶ勿論聖書に於てせざる可らざ然れども聖書ハ風俗制度人情言語を異とする他國の書よして然も二千年に垂んとするの古書かり之を十分よ解する容易の事も非ざ是れ邦語を以て又現

二
時の思想を以て著はされたるキリスト傳の必要ある
所以なり泰西諸國年々歳々キリスト傳の夥多かる刊
行ある怪むは足らざるなり

我國聖教の輸入以來日尙ほ淺きも教書の出版ある年
々數十部は下らざりしてキリスト傳に至ては僅かよ
一二の譯書あるのみ豈は嘆は可んや此頃竹越與三郎
君流暢の筆平易の文を以て其傳を著はざる蓋しキリ
スト教の進歩を助くるは於て幾分の補益なきは非る
べし書中或は撰て精からざり輕重長短度を得ざるの點
なきはあらざるべきも今日ハ其書の價值を問ふべき
の時ハ非ざり完全なるキリスト傳の如きは吾人之を後
日ハ期せざる可らざり願くハ神の恩寵讀者の上ハ優る
からんとす

京都同志社

明治廿六年八月

小崎 弘 道 識

基督傳記序

天下宗教の數多しと雖もキリスト教の如く重きを祖
師の人品より置くものハあらざ、キリストの言教實に貴
し、眞珠の玉よりも貴し、然れども其貴き所以ハ言教其
れ自身の價あるよ由るのみからざ、亦た言教の主なる
キリストその人の品性の價よ由るもの多しとす、若し
夫れ言教を各個に分截して他より其の類似を求めば、或
ハ支那印度の諸教中より之あらん、或ハ埃及、希臘の哲
學中より之あらん、特にユダヤ先哲の教誨中より尤も
多く類似のものを見出すとあらん、然れども天下萬世

二
は通じて絶待孤立他は比類ある可らざるものハキリス
トの品性即ち是れなり凡ての言教を統一して具
体的に代表するものハキリストの品性なりキリス
ト教ハ即ちキリス
トなり

今このキリスト傳ハ友人竹越與三郎君の著述せるもの
よして平易明晰偏せざ黨せざ單へは四福音のキ
リストを描き出さんと力むるものなり之を一讀すれば
則ち宛々春日朝早く起きて曠原の表を逍遙するが如
く神氣自ら爽然たるものあらん

蓋しキリスト傳を記するの法一よして足らざ或ハ批
評的に論判して事蹟と言教の正否を定めんとするあり
或ハ心理的の考究してキリストの人物と思想の發
達を説明せんとするあり或ハ敘事的の篇成を以て先づ
當時の風土人情を論述し之を下地として其の上よキ
リストの人物を寫し出さんとするあり本書の如きハ
寧ろ後者の類に屬するものよして通俗の讀者には尤
も適當するものと謂ふべし本書を坐右に置き四福
音書を讀む人ハ譬へば好案内書を所持して各勝を探
るの雅客に似たり基督の教會は深く著者に向つて謝

する所をみるべからん

明治二十六年三月下旬

横井時雄誌す

基督傳記序

昔イエスエルサレムに入らんとて橄欖山を下れる時
弟子の大衆口々神を讚歎して曰く主の名よよりて
來る王ハ福ひかる哉と耶蘇の敵徒怒りて曰く師よ弟
子どもを制したまへと耶蘇答へて曰く此輩もし黙ま
りかば此らの石叫ぶべしと此の答ハ數言にして無量
の意味を含めり語り曰く天下の道ハ多しと雖も皆羅
馬よ達すと天下の眞理ハ果して天下の眞理たらば早
晩必だ天下に普く行をハるゝに至る若し腕力を以て
之が讚歎者の口を箝せば四圍の石皆代りて叫ばん此

六
等無数の石たるや彼の昔しセーブズの神泉は主はけ
る龍の牙は千萬倍す、人力は到底之を防ぐ克はざる也
「嬰兒及び哺乳者の口はすらも讚美はそゝはれり」
基督教ハ一人種の宗教(Ethnic Religion)は非也、實は天下
の宗教(World Religion)なり、流石のベンナン(Bennan)も叫びて
曰く、

基督教ハ天下の宗教として又天地と、も無窮な
るべき宗教なり、寔は耶蘇の宗教ハ或る點に於て終
極の宗教なりとす……耶蘇ハ絶對の宗教を立てた
り……彼が教へたる所ハ固執極まる獨斷説はあら

無限の解釋を容れて窮る所を知らざる一群の觀
念なり、

嗚呼彼ハ心を石としてたるも、其石みづから斯く叫べ
り、

此の如き宗教の創立者ハ萬人の須らく研究すべき者、
否も萬人の一たびハ研究せざるを得ざる者なり、
今此基督傳を繙閱するも、健全なる精神と銳利なる眼
光を以て該神人の言行を忠實に描寫したる者あるハ
紙上歴然として見つべし、著者自ら之を「普通の傳記」と
稱す、是また耶蘇傳の一體として、特に目下に必須なる

と著者の夙に洞見したるが如し、キリストの傳もとより此に竭き迄と雖も、學者は先づ此門より入らざるべからば、之が文章の果して能く此天下の最大事件を寫せるや否やといふの疑問に對しては、竹越與三郎といふ名こそ十分の明答を與ふる者なれ、

明治廿六年六月二十一日

高橋五郎謹誌

基督傳記序

英の革命史中より、クロムウエル、ハムプデン等の名士を抜き、米の建國史中よりワシントン、フランクリン等の傑士を除けば、立憲政の光華、自治制の整備を以て宇内に稱せらるゝの雄國を見ることおげん、尙ほ之より甚しきものあり、我基督教中より基督を拔去らば、其餘す所果して奈何ぞや、是猶ほ眼鏡橋の拱心石を抜きたるが如く、舊新約兩柱の潰滅期して待つべく、基督教的文化の美を見んと欲するも、豈に夫れ得べけんや、是を以て夫のセルソスが「真正講談」の大著述をかし、以

て本教を駁撃せし以來、今日に至る迄、宗難者出る毎と
も、銳鋒を集めて此拱心石たる基督を打破せんと試み
しハ頗る正鵠を得たりと謂ふべき也、實は宗難者ハ基
督の神聖を削りて一の豪傑たらしめ、其神子の位を褫
奪して聖賢の班に列せしめんとし、甚しきは偽聖を以
て稱するものありき、然れ共此論難駁撃ハ毫も基督の
眞價を減ぜざるに至らず、之を仰げば愈高く之を鑽れば
彌堅く其徳光の映射する處何人の同化せられざらん、
看よ全幅の精神を竭して批難を試みたるルナンも遂
に基督ハ至大至聖至らざるなきの人也、宇内無双の人

+

也、万民擧つて神子と稱す蓋し故なきにあらずと絶叫
したるを、又看よルーソーも福音書の眞率愛すべきを
賞し、哲學書の虚飾厭ふべきを嘆じ、遂にソクラテスも
して聖人の死を考せりとせば、實は耶蘇基督の死状ハ
神の如しと断定したるを、
世の基督教を解せんと欲する者ハ、奇跡の眞偽、預言の
應否、代贖、復活等の難問題を講究するに先ち、宜しく基
督の大品性、大意識を學ぶべき也、一たび四福音書を繙
き、ナザレの耶蘇が身ハ木工の服を着け、悠然として
ユダヤ原頭より立ち、汝ら天空の鳥を見よや、稼ことおく

稽ごととせど倉に蓄ることなし、然るも汝らの父は之
 と養ひ玉へり、また何故よ衣の事を思わづらふや、野の
 百合花ハ如何よしして長かと思へ、勞めど紡がざる也、と
 の教をかすを見れば、誰か飲食衣服の末よ醜陋たらんよ
 りハ、寧ろ進んで神の國と其義を求むるの高尙優美を
 するを悟らざるものあらん、又夜色沈々たる一閑窓の下
 ヌダヤの學者ニコデモよ向つて更生の眞理を説く處
 荒涼寂寞たる舊井戸の側、一賤婦よ向つて悔改の大道
 を示すの邊、無量無限なる神愛の沛然として注ぎ來る
 を見ば、自ら新生命の源泉混々として湧出し、永生よ至

るを覺ゆん、ゲツセマ子の祈禱、至誠血汗を絞り、カルバ
 リ山上、生母マリヤとヨハチよ委托するの至孝、彼等ハ
 其爲す所を知らざ、罪を彼等に歸する勿れの愛敵心を
 玩味せば、ルナン、ルーソーの賛辭を繰返すの止むべか
 らざるものあらん、

偏理論者動もすれば、基督の大品性大意識を悟らざし
 て、基督教秘義多し、其所説妄誕よ近しと云ふ、是俗人の
 見のみ、平々たる坦路豈よ巨人の跡を認むるを得んや
 若し夫れ此大品性、此大意識の淵源、那邊よ存するを知
 らば、奇跡、預言、代贖、復活等の妙理ハ、釋然氷解するよ至

らん。
 教友竹越君爰は四福音書を基き平生沈思默會するも
 のを以て、基督傳記を著はさる、余之を讀むに、滔々數万
 言欽仰敬愛の至情溢れて流麗の文とあり、余輩をして
 活基督に接するの感あらしむ、皇天願くハ著者が我邦
 人をして、道義の淵源、生命の活泉を知らしめんとす
 れ、衷誠を嘉みし、斯書の目的を達するの福祉を垂れ玉
 はんことを。

明治二十六年初夏

宮川 經 輝 謹 識

基督傳記目錄

- 第一 宇宙の美麗ハ其調和にあり○第一、人と自然との争及其調和○第二、人と英雄との争及其調和○第三、人と神との争及其調和○最後の調和者……一
- 第二 耶穌誕生の時の羅馬國○耶穌の母の人品○耶穌の降誕○及び之れに伴ふの奇跡……一四
- 第三 猶太國民教主を待つ○耶穌殺されんとす○ナザレの地勢○耶穌の家庭蘇敬神家に驚嘆せらる○十二歳の時神を父と呼ぶ……二六
- 第四 耶穌の品性○當時に於ける三大黨派○耶穌の先驅にてヨハネ○耶穌洗禮を受く○人の靈は神の靈に圍繞せらる○耶穌最初の傳道……三八
- 第五 初めて奇跡を示す○四十日の斷食○心中の大争闘○生涯の大時期……五一
- 第六 耶穌第一回の入京○神殿を清む○ニコデモに天國を説く○耶穌の教……五八
- 第七 ヨハネ、耶穌を神子とす○ヨハネの信仰勸誘す○耶穌、ヨハネを許す○安心立命の教○活ける水の説教○耶穌の教の特質……六七

第八 第二回の入京○保守黨に懸されんとす○安息日の姑息論を破る○彼果して神の子なる乎○權化説○神人○調和の大理想彼に現れざる可らず……七五

第九 使徒の撰任○山上の垂訓○管時の定説と垂訓の衝突○耶穌の教の宗教にあらす哲學にあらす人間の大道也○宗教と哲學の調和也……九六

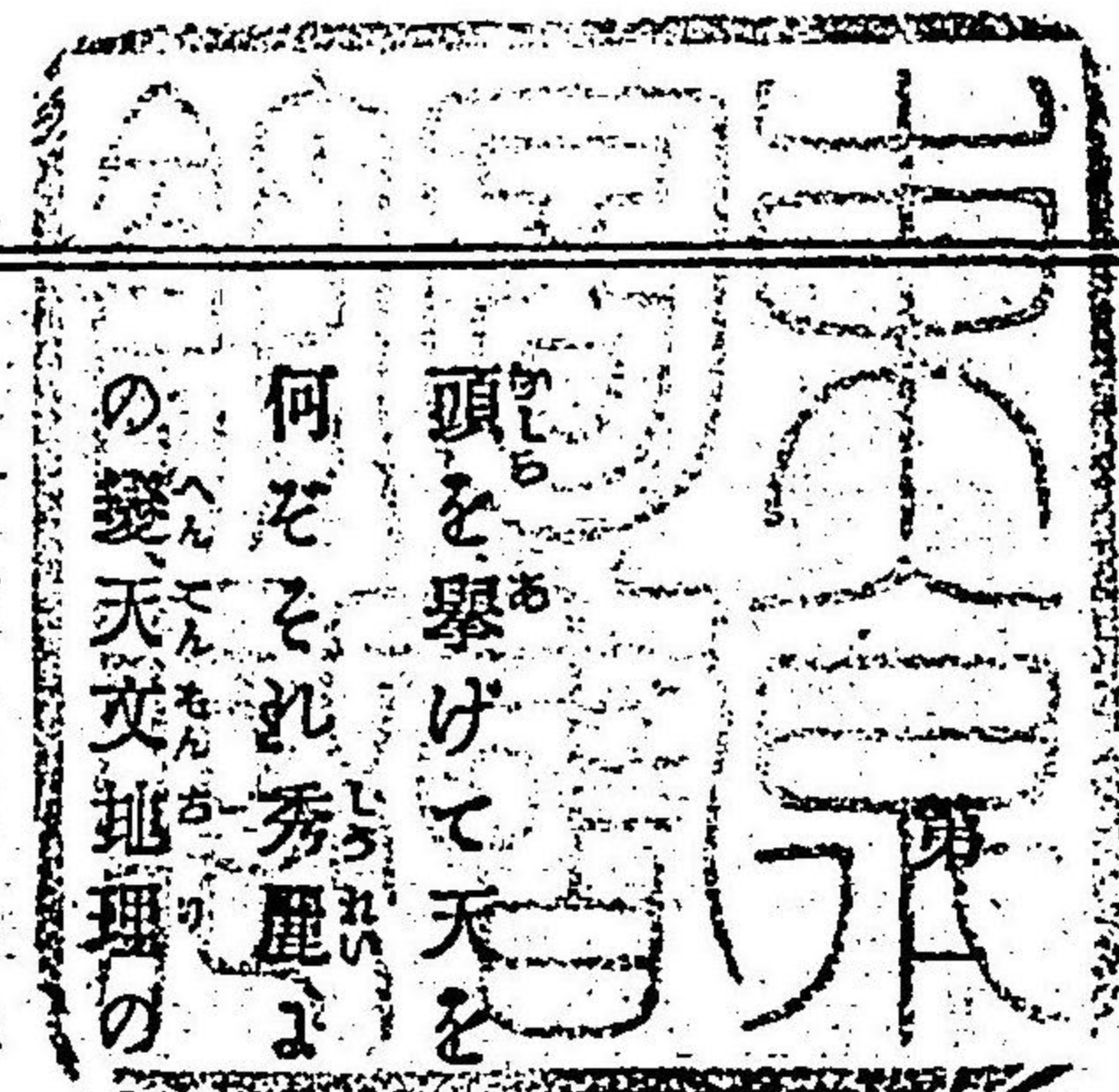
第十 耶穌の殊に注目せる階級○天國に在る者の性質○耶穌の天國と他の宗教の天國○群民耶穌を擁して政治上の救主たらしめんとす○弟子の反覆○保守黨事大黨の憤激○耶穌の死の必然の結果也○耶穌が死を避けざるの心事○サタヌと退げ……一二五

第十一 最後の勝利の入京○弟子の心に地上の天國を望むの心を生ず○人に長たらんとせば人の下たるべしとの教○人心動搖四方より京城を攻むるの趣あり○法教師等耶穌を圍みて難問す○反對黨耶穌を殺さんと計る○ユダヤ耶穌を賣るの心術○新しき説……一四四

第十二 最後の訣別○ゲスマニの祈○捕束來る○ペテロ劍を抜く○耶穌訊問せらるる○ヒラト死刑を難す○逆待の後棄殺せらるる○庭○傳道の命令○天國遂に來る……一七一

基督傳記

竹越與三郎著



宇宙の美麗の其調和にあり○第一、人と自然との争及び其調和○第二、人と英雄との争及び其調和○第三、人と神との争、人と人との争及び其調和○最後の調和者

頭を擧げて天を望み、頭を垂れて地を望むに、我が生活する所の世界の何ぞぞ、秀麗として廣大に、且つ幸福らしく見ゆるや、四時の代謝、風光の變、天文地理の文より、飛禽走獸、虫魚の類に至るまで、皆か我を樂しむるものよ、あらざるはなく、皆か我が用を爲すものよ、あらざるはなし。我世界の涙の谷にあらすして喜びの家也。牢獄よ、あらすして自由の野也。然れども、翻て、實際に於て、我が人類が如何に聲高く叫びつゝ、來るかを

聞けよ。彼等の此の秀麗なる天地にありて哀々として悲み嘆き。此廣大なる天地にありて、跼蹐として自由を失し、蹒跚として歩行し、艱む者の如し。我が人類の幸福らしく見へて、實に苦艱ある、不可思議なる宇宙に漂泊ふ者なる哉。

我等の祖先が、初めて裸躰よして此地上に生れ落つるや、北光燦爛として、地平線の彼方より我を照らし、(日耳曼史哲學)草木榛々として我前に繁り、美なる山川の鬱々と我指顧の下にあり、菓實の何人の供へたるかの如く、我前に熟せり。此に於てか我が祖先の實より自ら幸福あるべしと思ふたりき。然れども此の暫時の夢にして、須臾よして、彼の天地の自然力と相争ひざるべからざるよ至れり。見よ、北光の彼方より氷風面を打つて至り、美なる晴天の忽ち雨雪を降らせ、我の先づ之を防ぐがため衣服を裁し、家屋を建てざるべからざるに至れり。然れども彼の武器と

して、只だ二本の手と、二本の足と、最と長く延びたる爪あるのみ、如何よして此自然力の攻撃に應せん乎。此の如く、先づ人類と自然力の間に第一宣戦を爲されたる以來、此闘の須臾も間斷あかりき。彼れ右せんと欲すれば、大山ありて之を支へ、彼左せんと欲すれば、大江ありて之を妨げ、進まんと欲すれば、猛獸毒蛇ありて之を妨げ、退かんとすれば、饑寒困窮交も至る。此の如くして我が祖先が飄然天地の間に漂泊せし以來、人類は常より自然力に對して望なき戦を爲しつゝ、來り、其結果、自然力の奴隸となり、大山を見ての恐れ、大江を見ての恐れ、大獸巨禽を見ての恐れ、遂に之を尊みて神となすものあるに至れり。

斯くて、我が祖先が、男を生み、女を生み、一家を作り、一郷を作り、一社會を作り、米麥を種へ、菓實を貯へ、禽獸に向つて戦ふべき粗末なる武器の發明せらるゝや、思らく、我等の是より幸福ならんと、然れども之もまた一

の夢なりき。何となれば、人類の同士打の之より初まりたればあり。或る者の智巧を弄して富の分配の多からんことを望み、或る者の力を恃みて尊榮の地を居らんことを企て、黨を作り、派を樹て相争ふに至りて、彼の智者強者の、衆民を壓して之を制抑せしかば、衆民の彼の風雷山川を恐れて之を神とせるが如く、また此強者と智者とを尊とびて、神とするに至れり。

夫れ宇宙萬物の一体にして相和すべきもの也。相和すべき一体にして相争ふ、之を名けて宇宙の分裂と云ふ。此に於てか、秀麗なる山川も、清美なる人類も、其價を失して修羅の姿となり、塵の家の一變して、涙の谷とある。

然れども我祖先の、一物おくして飄然天地の間に來りたるものにあらず、彼等の其肉と骨と共に、智力と自由とを携へて來れり。彼等の天地自然力の壓抑愈よ甚しきと遇ふて、益す其智力と自由とを反撥し來りて之と戦ひ、橋梁を架して川谷と戦ひ、船舶を作つて河海と戦ひ、家を造つて風雨と戦ひ、水を使用して火を攻め、火によりて水を攻め、自然力を利用して自然力を抑ゆ（佛人クラウ）此に於てか自然の人類の敵にあらずして、其友とあり、人間理學的の智惠の發達すると共に、人類と天地自然の力と相調和す。此の如くして彼等はまた政府ある道理を案出して、人民と治者との間を調へ、社會なる道理を案出して、貧富強弱の間を調へ、法律なる道理を案出して、人類と人類中の強者との間を調へんとす。故に人類の第一は理學的の知識と自由との發達によりて自然と調和し、第二の政理的智識と自由との發達によりて人と調和す。是れ猶ほ刀劍の小兒に對しての危険あれども、大人のためよの利器となるが如し、人間の智力と自由の幼稚あるや、天地自然と人類との其敵たり。其

六
智恵と智力の發達して成熟するや、天地人類其友たり、吾人の祖先以來
幾千萬年、宇宙の此くの如くして、歳々年々調和しつゝ、運行する也。
然れども、人類と天地自然とのみ、宇宙にあらす。宇宙との人類と萬物の
外、更らに自然を超越する超然力、即ち上帝を含有するものなるを知ら
ざるべからず。人類の此自然力以上の上帝の力よりて創造せられた
る者にてありしかば、彼等は上帝を知らず、自然力に驚怖し、人類の強者
に驚嘆し、或は牛蛇を拜して上帝とあし、或は山岳を禮して神明とあし
或は英雄を祭りて神となし、日夜に神に遠かり、之より延ひて人類相互
の義理をも誤る。故がゆゑに、宇宙の大調和を保たんとせば、人と人と
を調和するのみならず、人と自然とを調和するのみならず、誠とに人と
上帝とを調和せざるべからず。此の天地人三綱の調和成つて、宇宙初め
て圓滿なるべし。然らすんば、宇宙の猶ほ欠圓たるを免れず。

七
試よ考へよ、食物足り、衣服足れば、人心の満足あるべき乎。満足せざるの
証據に、自由を得んとして其生命を擲つものあるにあらすや。此に於
てか、政理なるもの案出せられたり。然れども法律上の權利確實されば
人の之に満足すべき乎。善良なる政府、善良なる社會すら建てらるれば
人類の願望の已に満足せられたりと云ふべき乎。否か、人類が政理
上の満足のみにて飽き足らざること、猶ほその衣食の足れるを以て満
足せざるが如し。見よ、如何なる人種か、人類以上の者を求めて、之に仕ふ
るの宗教制を有せざるものかある。如何なる國民か、其靈魂に安慰を與
ふるの宗教制を有せざる國民かある。蓋し人の肉體の外、靈性を有す。實
體の外、本體を有す。彼の理學的の進歩、政理的の進歩、此實體、肉體の願
望を満足せしむるに過ぎず。靈性、本體を慰安するもの、之を他に求め
ざるべからず。此の如く理學的政理的の調和と共に、上帝と人類との調

和を爲すものありて、而して後、宇宙の美始めて見るべく、天地始めて、秀麗なるべく、始めて廣大なるべく、人生は始めて幸福あるを得べし、涙の谷なる人類社會をして、塵の家たらしむるには、猶ほ此の神人の一大調和を要し、人と人との政理的の關係を進めて、神人間の一大調和を要す。

此よ於てか大人君子、此調和を計らんとするもの多し、印度の伯羅馬教がブラマ、ヴェーノ、シバの三神を立て、創造保安、破壊の三神となして、以て萬民をして之を拜せしめんとせるが如き、波斯のゾロアストルが上帝の光明也、惡魔の暗黒也、光明を拜せんに、其化身たる火を拜せざる可らずと、拜火教を主張せるが如き、釋迦が極樂と地獄とを分ちて、以て人心の歸向を定めんとせるが如き、皆神人調和の目的にあらざるのなし。然り彼等の一部の眞理を識認し、一部の調和を爲し得たるよの相違

なし。然れども彼等の猶ほ道を清うして、更らば全軀の眞理を述べて、全軀の調和を爲し、以て人類を涙の谷より救ふものあるを待つのみ、化學の前に煉金術あり、論理學の前に詭辨家あり、教主の前に預言者あり、以上の宗教が眞正の神人調和、人類調和に待つ所あること、猶ほ此の如し。此大成なる調和者、教主の出るまでの、萬民擾々天に向つて叫んで已まざる也。

而して此教主の理想の最も明白に顯はれたるのイスラエルの預言者イザヤの腦中にあり。彼曰く(イザヤ書)

我等が宣るところを信せしもの誰ぞや、エホバの手誰にあらんれしや。彼れの主の前に芽のごとく、燥きたる土より出づる樹株のごとく育ちたり。我等が見るべき麗のしき容なく、美しくしき貌のなく、我等が慕ふべき艶色なし。彼の侮られて人にすてられ、悲哀の人よして

病患をしれり。また面をおはひて避ることをせらる。もの、如く侮
られたり。我等も彼を尊とまざりき。誠に彼の我等の病患を負ひ、我儕
の悉みを擔へり。然るに我等思へらく、彼の攻められ、神にうたれ、苦め
らる、ありと。彼の我等の愆のために傷けられ、我等の不義のために
碎かれ、自ら懲罰を受けて我等に平安を與ふ。其撃たれし痕によりて
我等の癒されたり。我等のみな羊の如く迷ひておのく己が道にむ
かひ行けり。然るにエホバの我等凡べての者の不義を、彼の上におき
給へり。彼の苦めらるれども、自から謙だりて、口をひらかず。屠場にひ
かる、羊の如く毛をさる者の前に黙する羊の如くして、その口をひ
らかざりき。彼の虐待と審判とによりて、取り去れたり。其代の人のう
ち、誰かかれが活るもの、地より絶れしことを思ひたりしや。彼の我
が民の愆の爲うたれしあり。その墓の悪人と共に設けられたれど

も死るときに富る者と供にされり。彼の暴をおこさぬす、その口は
虚偽なかりき。されどエホバの彼を碎くことをよるこびて、之を惱ま
し給へり。斯て彼の靈魂と、かの獻物をなすにいたらば、彼その手をみ
るを得、その日の永からん。かつエホバの悦びたまふこと、かれの手
によりて榮ゆべし。彼の己が靈魂の煩勞をみて、心たらはん。わが義し
き僕の、其知識によりて、多くの人を義とし、又彼の不義を負はん。此故
に我、彼をして大なる者と、ものに、物を分ち取らしめん。彼の強きもの
と、ものに、掠物をわかちとるべし。彼のおのが靈魂をかたふけて死に
いたらしめ、愆ある者と、もよ敷へられたれなり。彼の多くの人の
罪をおひ愆あるもの、爲めに調和をなせり。
彼の此の如く、全世界の人類の罪惡を一身に負ふたる救主よりて、神
人の調和せらるべきを預言し、而して其調和の成りたる曉、左の如き

天國を來すべしと預言せり。

エツサイの株より一つの芽いで、其根より一つの枝はゑて、實を結ばん其上よエホバの靈といまらん、これ智慧聰明の靈、謀略才智の靈、智識の靈、エホバをおとるゝの靈なり。彼のエホバを畏るゝをもて、歡樂とし、また目みるところによりて、審判をなさず、耳きくところによりて、斷定をなさず、正義をもて、貧しき者をさばき、公平をもて、國のうち、の卑しき者の爲めに、斷定をなし、其口の杖をもて、國をうち、其口唇の氣息を以て、惡人をころすべし。正義は其腰の帶となり、忠信の其身の帶とならん。おほかみの小羊と、もにやどり、豹の小山羊と、もよふし、犢の肥たる家畜と、もに居て、ちひさき童子よみちびかれ、牝牛と熊と、食物を同よし、熊の子と牛の子と、もよふし、獅子のうしの如く、藜を食ひ、乳兒の毒蛇のはらにたのふれ、乳ばなれの兒の手をまむし

の穴にいれん。此てわが聖山のいづこにても、害ふことなく、傷ることなからん。その水の海をおはへる如く、エホバをしるの知識は、滿つべければなり。

すゑの日に、エホバの家、山は、もろくの山の頂、豎ちもろくの嶺より、もたかく擧り、すべての國の流のごとく、かれにつかん。おほくの民ゆきて、相語りいん、いざわれらエホバの山よのぼり、ヤエブの神の家、にゆかん。神われらにその道ををしへ給へん。われら其路をあゆむべしと。その法律のシオンよりいで、エホバの言のエルサレムより出べければなり。エホバのもろくの國のあひだを、鞫き、おほくの民をせめたまへん。斯てかれら、其劍をうちかへて、鋤とさし、その鎗をうちかへて、鎌となし、國の國よひかひて、劍をあげ、戰鬥のことを再びまなばざるべし。

此より後イスラエル人の、大旱も雲霓を望むが如く、代々世々、踵をつき
 て、以て救主の出でんことを望みたりき。而して後六百年にして漢孝平
 帝の元始元年垂仁天皇の三十三年、猶太の寒村ベツレヘムに耶蘇ある
 一小童生る。是即ち人類が仰ぎて以て救主となし、神人調和、人類調和、宇
 宙の大和合、彼によりて成るべしと爲されたる者也。彼の果して誰ある
 乎。彼は何處より來りし乎。彼の何事を爲したる乎。彼の如何にして神人
 の間、人々の間を調和せんとしたる乎。彼の果して救主なる乎。

第二 耶蘇誕生の時の羅馬國○耶蘇の母の人品○耶蘇の降誕○

及び之に伴ふの奇蹟

羅馬の大共和國は國家を神壇とみさんばかりに尊敬し、國家の領分を
 廣むるを以て、其大目的とみせしかば、其自由人民の足下に、全世界を蹂

躪せせんばやまざらんとせり。此くて幾多の政治家、將軍出でしが、ポン
 ペイクラッパス、シーザルの三人、共和國の爲め、四方に征戰して、大に地
 を略し、三人相争ふてシーザルの世となり、シーザル、ブルタスに刺され
 ブルタス、アントニーに滅ぼされ、アントニー、シーザルの姪、アウガスタ
 ス、シーザルに亡されしより、羅馬國は、一變して帝政となりしが、此時、其
 領地の西のアトランチック海に至り、北の日耳曼のタニウプ、ライン河
 へ限られ、東のニウフネート河に及び、南は亞刺比亞、亞弗利加の沙場に
 盡き、(羅馬史)羅馬の都のみよて、四百萬の住民を含む、一大帝國となれり
 されば、曾てイスラエル種族が、大首領モーゼに率へられ、地上の天國と
 目ざして來りし猶太の地も、猶太王國の亡ぶる耶蘇の前五百八十六年
 にあり、此羅馬大帝の足下に蹂躪せられ、僅かに屬國とありて、其餘喘を
 保ちたり。已にしてアウガスタスの其國民を一統し、併せて民生の實際

を調査し以て亂後の政を布かんがために、民をして各々其本土に就きて
 姓氏を記さしめたりしが、ユダヤの王ヘロデの古法に従ひ
 民族によりて戸籍を分ちたりしかば、ナザレ村の匠夫、ヨセフのダビデ
 の系圖に關するの故を以て、其約婚の妻マリヤを携へて此の點檢に應
 せんとし、道を急ぎてダヴデ種族の本土なるベツレヘムに歸りしも、戸
 口調査の爲め、旅客充頓して宿すべきの家あかりしかば、或る家の厩に
 宿したり。此夜、ベツレヘムの近傍に羊を牧するもの野に在りて其羣羊
 を守りつゝ、ありしに、忽ち一道の天光、熾々として其邊りを照らしけれ
 ば、牧者は何事の起るべき乎と、最と甚しく恐れたりし、何處ともなく
 天に聲ありて曰く、懼るゝこと勿れ。われ萬民に關りたる大なる福音を
 爾曹に告ぐべし。今日ダヴデの邑に於て、爾曹萬民の爲に教主を生まれ給へ
 り。是主たるキリストあり。爾曹布にて裹し、嬰兒の槽に臥たるを見ん。是

その徴なりと。已よして天上また聲ありて曰く、天上にの榮光神にあれ
 地にの平安、人よの恩澤あれと。此に於てか牧夫等は大に驚き、怪し
 が、彼等もまた世の濁を厭ふて、教主の來らんことを待ち望む。敬神家に
 てありけん。互よ告げていざ天の使の示めし給へる所よゆきて、我等の
 教主を見んと、急ぎベツレヘムに入りて、彼所此所と搜索せしに、正よヨ
 セフの約婚の妻、マリヤが、驟かよ産氣つきて、冢子を生みしも、そを置く
 所なかりしより布にて裹み、之を馬槽の中よをくに、出遇ひしかば、天使
 の告げたるの、正よ是ならんとて、歡喜して天に感謝し、事の顛末を近傍
 よ語り傳へしかば、人々皆な驚き、怪みたりき。
 之より先きマリヤがヨセフと婚姻を約したる後、天の使あり、幻にマリ
 ヤに告げて、慶たし惠るゝ者よ、主あんちと偕に在す。爾の女の中よて福
 なる者なりと云ひしかば、マリヤその言を訝りし、天使重ねて懼るゝ

勿れ、爾は神より恵を得たり、爾孕て男子を生ん、其名を耶蘇と名べし、かれ大なる者と爲て、至上者の子と稱られんと云へり。マリヤ天使に曰ける、我いまだ夫に適ざる、如何して此事あらんと。天使答て曰く、聖靈なんぢに臨る、至上者の大能なんぢを庇ん、是故、爾が生ところの聖なる者、神の子と稱らるべし、蓋神に於て能ざることなれば也。マリヤの父のシユアムと云ひ、ナザレ村の牧羊夫なりしが、敬虔にして神に仕へ、利名を省みずして、單すら上帝の旨に適へんことを求むる者ありき。其二十歳の折、妻アンナをベツレヘムの村より迎へたりしが、凡そ二十年間も子なかりければ、父母の泣きて上帝に祈りしが、二十年後に至りて生れし、此マリヤにして、其ヨセフに嫁せし、後妻として嫁せし也。(福音傳)か、れば其家庭の空氣の宗教的にして、萬事敬神を先とし、朝夕の禮拜、事々よつさての祈禱、感謝を重んじたりし、疑ふべからず。

此く、此女の三歳の時、神の宮に捧げられて、他の處女と起居を共にし、十二歳迄、宮中にありしが、午後の三時迄は神に熱禱し、三時より夜の九時迄、紡績に餘念なかりしと云ふ。其身幹の普通にして、容貌の清くして、笑のしく、寡言にして、淡泊に、且つ正直にして、偽を嫌ひたりと云ふ。(福音傳)是れ其の周圍の空氣の如何、彼女の氣質を作りし乎、如何に敬虔の念深かりしかを察するに、餘ある也。彼女の家庭も已に此の如く彼女の氣質もまた此の如く、萬事を上帝に一任するものなれば、深く天使の夢を神の旨なりと信じて疑はず。其夫ヨセフも語り聞かせしが、今や其冢子の生るゝに方りても、また此の如き不可思議を聞きければ、一層深く神の旨なることを信じたりき。是れシーザルのブルマス刺されしより四十四年後の事なりき。抑も耶蘇の傳記を讀みて、開卷第一、此不可思議なる奇蹟に出遇ふや、人

多く疑惑を生ずるを免れず。然れども余れ讀者よ問わん卿若し。上帝を
信せざる乎。その上帝の存在より説き初めざるべからず。然れども卿若
し此宇宙に、上帝、神明若しくは造物者なる者ありて、宇宙を支配する
ものあるを信する乎。此の如き奇蹟の何ぞ怪しむに足らんや。それ父母
ありて子あるの所謂る自然法あるもの也。耶穌が神の聖靈よりて處
女マリヤに宿りしと云ふを疑ふもの、其事、自然法に反するが如くな
るを以てあり。然れども試し思へ、此世界は自然法の存するの何者の所
爲ある乎。是れ此天地を創造せる上帝の所作にあらずや。上帝已は此自
然法を作りて、自然界を支配するとせば、何を其の自然法以外の所作を
爲すことあるべきを疑ふを要せんや。若し之を疑ふとせば、是れ上帝の
自然法の下に支配せられて自由を有せずとなすものにして、上帝を輕
んずるの甚しきもの也。

我等の父母は父母あり、父母の父母に、また父母ありし、我等が知る所
なり。然れども我等の父母の父母の父母の、千萬年前の父母、即ちアダ
ムとイバとの如何にして造られし乎。人の生る、只は自然法の外に出る
能はずとせば、アダムとイバとの、即ち自然法以外の法によりて作られ
しものにあらずや。好し人間の祖先の、アダムとイバとの二人あると云
ふことを信せざる者も人間の祖先の、即ち何時か一度造化の手により
て作られしを承認せざるべからず。上帝已に千萬年前に、自然法外の法
によりて人を作りしとせば、今日に於て、耶穌が自然法外の法により、人
間を現はれ來りしもの、豈に怪しむに足らんや。耶穌が一生の行路を思
ひ、其生る、や此の如き奇蹟ありしもの、寧ろ當然なるを見る也。
且つ此の如く、我等が見て以て自然法に反するが如しと爲すものも、實
の宇宙の大景を達観すれば、自然法と相併行するものにして、決して相

反するものにあらず。それ萬物下に落つるの重力の理法也。我れ拳大の石を天に擲てば、霖々乎として地に落ち来るの、此理法による也。然れども我若し一尺四方の板を以て、落ち来る石を受け止むれば、石の地上に落ちずして止まる也。此の如きは小兒の一見して重力の理法と相争ふものとなす。然れども其實の相争ふあらずして、または是れ等しく重力の理法たる也。此の如く我等人類の智力の幼稚なるや尋常の理法以外の方より出て来るものを見て、自然法に反するものとあすも、其實の決して自然法は相反するものにあらず。

宇宙に自然法の存するの何人も識認する所なるべし。然れども之と共に、其傍は自由力なるもの、存立し、萬物の存立生長の一は此自由力よるものなることを知らざるべからず。(上帝の自願) 故に見よ此世界なるもの自然法に従ふも、其運動の跡を見れば、常に自由に自然法の外に逸

し去らんとする也。例せば物質なるもの、默然として語らず、盲乎として自ら動かす、一は自然法に盲従すれども、其變じて草木と爲るや、自然法に對抗して進むもの、如く、風雨を犯し、寒熱を凌ぎて生長す。是れ何の故ぞ、自由力の其中に入りしがため也。已として物質進化して動物とあるや、其自然法は服せざることを愈よ甚しく、重力の理法をすら制し得る也。而して其物質一變して人となるや、其發達愈よ高くして、其自然法に服せざる愈よ甚し、日耳曼のセーリンヒ曰く、物質の草木に眠り、動物は夢み、人は於て寤むと。寤むとの何ぞや、自由を得るの謂也。此の如く、宇宙の自然法あり、自由あり。此二者共に宇宙の創造と共に上帝の與ふる所也。吾人が稱して奇蹟と云ふの自由力の發動多きを視て之を云ふのみ。然れども其實敢て怪しむよ足らざることを此の如く、吾人々類の目を閉れば、暗らく、目を開けば、光あり、變化自在にして、一も他も制せらる

る所なし。殆んど上帝が其處に光あれよと云つて、光あるが如し。若し日々人類を見ずして、適ま人類を見べ、人類あるもの、また實よ一大奇蹟と云ひざるべからず。

豈に唯だ人類のみならんや。遡つて之を論ずれば、彼自然法あるものもまた實よ一大奇蹟なり。吾人未だ曾て、重力の理法なるものを知らず。突然空中より向つて石を擲つよ自から孺々然として下り來るに逢ひ、實よ一大不思議と呼ぶならん。何人か此の如く石を下すか、石の何故に天よ達せずして下り來るか、是れ奇蹟中の奇蹟なり。而して學者之よ自然法の名を付すれば、即ち安心す。試に問ふ之に、重力の理法ある名を附したりとて、白の色なりと云ふと全しく名を付するのみよして、重きものが下に下るの理の、一毫も解説せられたる所なきよあらずや。而して理法と云へば人安心し、奇蹟と云はば人疑ふ。其實奇蹟もまた宇宙に行

る、一大自然法の一のみ、自然法もまた奇蹟の一のみ。故に曰く上帝の存在を識認する以上の奇蹟の敢て怪しむに足らず。奇蹟の決して自然法と相衝突するものよあらず。奇蹟の吾人人類が日々夜々に見る所なり。故よ曰く、耶穌生誕の奇蹟の、また決して怪しむに足らなしと。

然りと雖も、奇蹟の耶穌の生涯に取りて、大切なるものにあらず。此奇蹟の敢て怪しむに足らずと雖も、奇蹟の有無の敢て耶穌を輕重するに足らず。耶穌果して救主ならざる乎。百の奇蹟、千の不思議ありと雖も、何の効かあらん。若しまた真正よ人類の救主なる乎。奇蹟なしと雖も、何の妨か之あらん。去れば奇蹟の、耶穌の如き使命を有する者の誕生に、伴ふべき必然の顯象ありと雖も、耶穌の價此にありとするの誤れり。耶穌の如き使命を有する者ならん、マリヤが聖靈によりて生むも、三セフによ

りて生むも、將た尋常一般の神を信せざる者より生るゝも何の障りか之れあらん。何者も一たび人間に生れんに、人の腹を借らざるを得ず。已に人の肉胎を藉る、其何人の肉胎たるを問ふを要せざる也。耶蘇の如きも已に人なるマリヤの腹を藉る、マリヤの何人ぞ、其父母によりて生れたる尋常の人ならずや。已に此尋常人の肉を受けて來る以上、ヨセフの子たるも、通常人の子たるも問ふを要せず。故に生誕の奇跡の耶蘇の教主たるに於て、些の輕重を爲すものにあらず。』

第三

猶太國民、教主を待つ。○耶蘇殺されんとす。○ナザレの地勢。○耶蘇の家庭。○敬神家に對嘆せらる。○十二歳の時、神を父

と呼ぶ

抑も猶太王國の亡びたるの耶蘇の前、五百八十六年よして、其の歴代の

預言者英雄の事業の、一は國民の復興を語つて、人心を振起するよ注がれたれば、國民の預言者の語りしが如く、敬神愛民の大英雄起りて以て國民を率ひ、敵國に向つて進向すること。モーセがエジプトを出でしが如くなるべしと信じたりし也。蓋しその初め預言者の預言の神人調和の教主ありて人類を救ふべしとの預言ありしと雖も、人の己を以て他を計り定むるの習あるものにして、文學者の凡べての人物を文學上より觀察し、軍人の凡べての問題を軍事上より論定するが如く、預言者が傳へたる教主の思想の、其初の神人調和の教主と信せられたるも、猶太國民が政治上の壓抑を被むること愈よ切なるよ従つて、愈よ政治的の教主と解せらるゝよ至れり。かくて預言者ミカが『ベツレヘムよ汝はエメの郡中にて小さな者也、然れどもイスラエルの君となるもの、汝の中より出づべし』と云へるより、萬民の目のメヅデの系統なるベツレヘム人

の上に注ぎしが、舊約聖書最後の預言者なるマラキより四世紀を経て
 耶蘇降誕の前後も及びての政弊愈々甚しきにつれて、政治的救主出づ
 べしとの念は、愈々固められ、殆んど其絶頂に達したり。
 去れば猶太王へロデも、國民の胸中に此の如き信念の存するを見て恐
 を抱きしが、人民が種々ある天象を見ては是れ救主の出づるの兆なら
 んと語り合ひ、地變を見ては驚破世變の端ありと傳へ、日々夜々に天象
 地文を見て救主を語るを見て、恐怖より猜疑より猜疑の疾病とあり
 其の妻マリヤも其の三子アレキサンドル、アリストボロス、アンチパ
 トルを殺すに至り、また國民の名望才能ある者を集會せしめて、一時
 に之を殺さんと計りしなんと、百方國民の信念も對して猜疑を逞ふせ
 り、此の如く國民已に亡國の民の日夜も物に驚くが如く、些々たる天象
 にも救主を語るはとなりしが、此救主の思想の獨り猶太國民に限られ

ずして、當時羅馬の權威の下に蹂躪せられたる小國の中にも傳播して
 延びて天象を好むアラビヤ、波斯の民にも及びたるものと見ゆ、恰かも
 好し、耶蘇降誕の頃異光を放つ一新星現はれしかば(ガリリヤの推歩によれば
 疑ふべ)人民の到る所、救主の思想と此新星とを混交て、流傳頻りあるよ
 折も折とて、東方一帶の諸洲に於て、近日一大帝王の現出するあらんと
 の説頻りに行われしかば(の歴史)東方の學士等、此新星の神人降誕の
 兆なりと推歩して猶太の預言に神人よ生るべしとありしを聞き、近日
 の風聞と彼れ是れ思ひ合せて、エルサレムに來り、ユダヤ人の王として生
 れ給へる者の何處に在す乎、我儕東の方よて其星を見れば彼を拜せ
 ん爲に來れりと云ひければ、へロデ王の大に心を傷しめ、學士博士高僧
 を會して古傳よ云ふ所の救主の生るゝの何所あるかを問ひしに、皆三
 カの預言を引きて、ベツレヘムを以て之よ答へしかば、へロデの先づ博

士を遣ひして之を索め、歸て復命せしめんとせるに、彼等へロデが教主に對して異心あるを思ふて、復命せずして家に歸りしかば、へロデ大に怒り、ベツレヘムと其境の内ある二歳以下の小兒を執へて、悉く之を殺せり。是れ何れの小兒が教主たるべきを知らざるが故、悉く二歳以下の小兒を殺さば教主のその中にあるべきを信じてなり。然れども實はヨセフ、マリヤも、已に博士によりてへロデの事を聞き、恐を抱きしよ、また夜るへロデ其子を害せんことあるべきを夢みたれば、耶蘇を携へて埃及に逃がれたれば、不幸に及ばざりき。

已にしてへロデの猜疑と心痛、其命を落せしかば、ヨセフ、マリヤもまた歸りてナザレの地に住せり。

ナザレの低がり、ラヤの丘陵より、シエズノールの平原に下る間にあるセブロン山中にあり、磨鉢を覆したるが如き谷地の小邑にして、此邑より

り見渡す地平線の極めて狭ましと雖も、丘陵に上りて目を放てば、南の廣濶よして肥沃なるエストロノンの平原、茫々として際りなく、模糊の間、エフライムの山を見るべし。西に地中海の大水、漫々として天を浸さんばかりにして、その左右に鬱たるガアメルガアメルの深林、隠見し、北の五百尺の小山を以て取りまかれ、小山の頂の遙かあまたの、高ガリラヤの名山ガリラヤ元として聳へ、ヘルモン頂の四時盡さざる白雪も見るを得べし。而してシヨルダンの澤谷の其東よ走つて、センチザレノスの湖水に至つて、盡くるを見る。十九世紀の今日よ於て、僅かよ六千の住民を有するに過ぎずと雖も、古代よありて、一層繁華の地たりしや疑ふべからず。一時間を費さば繁華なる隣邑セツボリスに達すべく、而して首都シヨルサレムに達するに三日の旅を要すと云ふ。而して此猶太の國たる此時に方つて、亞弗利加、亞細亞、歐羅巴の三國の交通よ於ける必由

の衝路なりき。世界の民を一齊に教へんとする耶蘇が此要衝の地よ生れしもまた偶然ならざるもの、如し(ストイブ及び)

耶蘇のかゝる美麗なる地よありて、ヨセフの家に養はれたりしが、ヨセフのイスラエルの大王ヌブデの後胤にして、今の一匠夫たるも、其脈路にの古名王の血を貯へ、他人も自から推す所あれば、自然に自重の念あり、また敬神謹嚴の人たりしや想ふべし。其母の固より父にも劣らざる敬神の念に富みたるの、其子に耶蘇ある名を附せしを見ても、之を知るを得べし。耶蘇との「其を経て神の救を與ふる者」てう意義よして其名によりて、如何に奇蹟が母の心に深く感せられしか、如何に其家庭に於て敬神の空氣の充滿せしかを見るべし。ヨセフの家業の匠夫あれば、イエスも日夕之を見聞し、長じて後の父の家業を襲ふたがしこと疑ふべくもあらじ、然れども工匠の猶太人の賤まざる所よして、多くのラビ(學師)

も、工匠を以て自ら養ふの風あれば、甚しく一般の社會と懸隔したる地位にのあらざりし也。然れども其貧窮ありしこと、の争ふべからず。猶太の律法に、婦人産後の日よ、小羊と班鳩とを祭司の前に携へざるべからざれども、小羊を献する能はざるもの、に、班鳩のみにてても許るされたり。然るにマリヤの班鳩を携へて祭よ上りしを見て、其貧しかりしを見るべし。

かくてマリヤが耶蘇を携へて京よ上るや、嘗つて奇跡によりて降誕の豫報せられたる小兒、一歳の幼稚よして、ヘロデ王の猜疑を受けて殺されんとせしナザレの耶蘇、來れりとして、教主を待ち望む者の中に、早く已よ盛んに傳唱せられしもの、如し京城の敬神家にして徳行の譽れ高きシメチンなるものありしが、教主を待ち望むこと極めて熱く、其心の中に、生命ある中に教主を見て、の去らざるべしと信じたりしが、今や

奇跡の評判多き耶蘇の京城に來れるを聞き、急ぎて神殿に入りしに、恰もよし、兩親が耶蘇を抱けるを見て、近よりて之を見れば、温手たる其容、嚴然たる其姿、何處ともなく救主たる、智慧の満ちたる如く見られしかば、嗚呼是れ、實は萬民の望む所の救主なるかと、天を仰ぎて謝し云ひける、主よ我目すでに萬民の前は設けたまひし救を見たり。これ異邦人を照さん光なり。また爾の民イスラエルの榮なり』と。シメオンまたマリヤに曰ける、此嬰兒のイスラエルの多の人の頼びて、且興らんこと、誹駁を受けんために其號に立らる。これ多の心の念の露のれんが爲なり。又、劔かんぢが心を刺透べし』と。此時アンナと云へる八十四才の女預言者ありて、其傍に立ちしが、彼女もまた、平生救主の降誕を待ち望みたる者にして、今やシメオンが耶蘇を讚美するを聞き、就て之を見て、また之より和し、遂に出で、多くの民に向つて、今殿上に見たる小兒こそ、名

高き耶蘇なること、耶蘇こそ誠に救主たるの儀表を具へたるものあることを語り傳へたりしかば、京城の人心之が爲めに動搖し初めたり。此時、ヘロデ朝の心中如何に痛みしか。然れどもヘロデの筆る傷むべきよあらず、救主を待ち設けたる京城の人民こそ、實は天の責罰を受けんことを知らざりしなり。

かくて耶蘇の智慧増々進み、敬神の念愈々厚かりしが、耶蘇の兩親の猶太の風に從ひ其子を携へて、年々歳々京城に上りしに、其度ごとに京城の人心を驚かせしが、珍奇あるものも、慣れての珍奇とせざるに至る習よて、此奇跡の子も、數年の後は評判以前の如くならざりしもの、如し。然るも其十二歳の折に至て、また人の視聽を驚かすのこと起れり。先きよも云へるが如く、耶蘇の家庭の敬神の空氣充滿したれば、宗敎的の教育の固より怠られずして、日夕舊約聖書を讀誦したるやまた疑ふべ

からず。故に耶蘇の少年にして、舊約の旨に十分通じたるもの、如く此くて其十二歳の折りよ、父母は従ふて京城に上りしが、父母の歸るに及びて耶蘇を見失へり。然れども父母の全行中の他の隊中にもやあらんとて、之を尋ねれども得ざれば、両親の初めて大に驚きて、京城へと引き返へして、彼方、此方と尋ねしよ、三日目よして、彼が神殿にあり、多くの法教師に圍まれて、談論しつゝ、あるを見たり。両親の其様の大人びたるに驚きて、之を戒しめて、「子よ何ぞ我儕よ此の如く行たるや。爾の父と我と憂て爾を尋ねたり」と云ひしかば、耶蘇の泰然として答へて、「何故われを尋るや。我の我父のことを務べきを知らざる乎」と云へり。父との何人の謂なるか。父の事との何事を指すか。今に於て、何人も之を知るものあり。之を知りたるの、只だ彼が十八年の後、救主として現はれたる時、神の子として讚美せられし時に至り、初めて其の父との上帝を指せしもの

なること發見せらる。當時の宗教の上帝を恐るべきもの、嚴しき主、黒雲に隠るゝもの、雷電の中よ見ゆるものと信じ、何人も上帝の慈愛ある父なりと云ふが如き思想を有するものあるあり。如何にして十二歳の小童が、一代の有せざる思想を有せしか。如何にして彼自ら神の子と信じたる乎。之を解せんとせば、只だ彼の十字架よ上りし後の事を見るの外なき也。

世に聖書の事實の小説的からんことを疑ふものあり。然れども初代の基督教徒の、現今も行はるゝ、聖書を以て淡白よ過ぎたるものとあしけん。多くの流傳を集めて、一種の聖書を作りしが、其内、以上の事實に關する小説あり、曰く「法教師が此小童に向つてアレフを綴れと云ひしよ、彼の然かせり。然れども法教師が重ねて、ベスを解けよと云ひし時に、小童の答て、汝余よアレフの意義を答へよ。然らば我汝よベス

の何たるを示さんと云へり』とて、小童の才智の勝れたるを示さんとせり。此の如きものをこそ小説的と云ふべけれ。現今の聖書が、初代の基督教徒に事實淡白なりとせられしに、適ま以て其事實として、一毫の飾なきを見るべき也。

第四

耶蘇の品性○當時に於ける三大黨派○耶蘇の先驅たるヨハネ○耶蘇、洗禮を受く○人の靈は神の靈に圍繞せらる○耶蘇最初の傳道

耶蘇の幼時に關して、聖書に現はれたるもの、以上の如きに過ぎず。如何にして其少年を過せしかの得て知るべきにあらず。また聖書の記者よして、或る淺薄なる想像家の云ふが如く、小説的の修飾を加へんと欲せしならば、此間こそ十分は小説的の誇張を爲し得る時あるに、其事な

く、只だ平淡に「智慧も齡も彌増りて、神と人との益々愛せられたり」と記せしは過ぎざるを見れば、以て聖書の飾なきを見るべく、而して耶蘇が圓滿和平なる發達をなしつゝ、ありしを推すべき也。思ふに耶蘇が其教主として現はれたる後に、云ふ所の舊約に基きて法教師に論し例とする所の葡萄の畑と云ひ、薊と云ひ、野は落ちたる種と云ひ、天空の鳥と云ひ、芥子種の信仰と云ひ、野の百合と云ひ、凡べて田野の光景を例とするを見て、其如何は深く舊約と自然界とよ心を寄せたりしかを推知するを得べし。且つ其言ふ所平易にして民に近づく、學說的の事なく、宗派的の議論なく、新耶蘇の論と云ひ、放蕩息子の論譬と云ひ、嬰應の譬と云ひ、眼前の景、即ち口頭の語とありて出でしを見て、決して深く當時の神學を受けしものにあらざるを知るべし。然らば即ち彼の如何よし、て自ら教主として出でし乎。其教主たることの如何にして覺知せし乎。

其の權威ある言の如何よしして得來りし乎。彼或の數々京城に上りて法教師の腐敗を見て、慨然として胸を打ちしこともあらん。人類の不幸を見て、涙を瀧ししこともあらん。此の如き遭遇の其心を刺激すること少なからざりしならん。然れども耶蘇の決して境遇の子よのあらず。ユニテリヤンの大教師チヤンニング曰く「人或は耶蘇の偽善ならんことを疑ふ、然れども其性質高潔にして優々、一も自ら作が如きものあるなし。人或の其熱心よりて此に至りたるを思ふ、余の固より宗教道德の大教師を判断するは熱心を勘考の外にすべからざるを信す。然れども如何は熱中するも、其狂せざる以上は其熱心せる以前の思想より外に逸し去るべきものあらず。今ま耶蘇が教主として出づる以前の一代の思想の、果して如何なりし乎。天國の地の王國ありしにあらずや。然るに耶蘇の天の王國を説きしにあらずや。只だ熱心と云ふの未だ以て耶蘇を説明するに足らず」と。然らば如何よしして耶蘇の品性の發達を説くべきか。日耳曼自由神學の首領たるカイムは之を説きて曰く「吾人の中よ、一人の眞正なる者顯のれり。此者よ於ては、人生の胸中に蓄藏せられたる神明的の種子が、皇天の奇跡によりて、完全圓滿に咲き揃ふたり。生れながらの神と人との交通の、彼に於て其頂上は達して、比類なく、永久健ちりき。彼よ於て吾人の凡べての無限より、神が前見し、愛撫せる創世の英華たる理想の人を見る。之を默想せば、凡べて上帝の愛ある願望の満足せり。何となれば此者の胸中に於て此者の容貌に於て彼(上帝)の彼自身を見れば也」と。これ此者の胸と容に於て、上帝自身を見るとすれば耶蘇の何者なる乎。果して人なる乎。神の子と云ふの外、此の如きものあるなけん。誠は耶蘇の生れながらにして、基督教主なりしあり。彼の自ら其基督たるを知らざるうちにも、其基督たるの品性の上帝の奇跡よ

り、花瓣の春風に開くが如く、芳草の春雨に長ずるが如く、開けつゝ來りし也。彼が十二歳にして『父の業を爲す』と呼びしを回顧せば、如何に基督たるの觀念が早く開けしかを見るべき也。彼の教育の子にあらず、また境遇の子にあらず。彼は初より彼也。只だ自ら起つの時を定むべき休徴を待てり、而して休徴は遂に來れり。即ち「マハチ」なる預言者が、其聲を大にして、天國は近けり、悔い改めよと、猶太の野に叫びたるもの是也。凡そ歴史上の大事變の皆な新勢力と舊勢力との衝突にあらざるはなし。今や耶穌が世界の人類を改造せんとするの門出に方つて、耶穌の周圍を圍繞せる人民、學說、宗教の一斑を知るにあらずんば、耶穌の事業を知り易すからず。抑も、當時の猶太の民の「モーセ」「ダヴデ」等の子孫なりと云へども、今や其祖先といふ全く一變したりと云ふべきものあり。舊約聖書最後の預言者「マラキ」より、代を經ること已に四世紀に及びたれば、風

俗、習慣、律法までも大變革を受けたり、而して當時國民の思想を支配せるもの、三個の黨派に分かれたり。第一は「パリサイ」派にして、舊約を固守するのみならず、敷代の間に生じたる習慣儀文を固守して、更らざらんことを求むるものにして、萬事儀文、禮式に流れたりしが、其仲間中等社會も多くして、當時の神學家「ラビ」若しくは神學の趣味を有する者を其派中に有し、而して「ローマ」に對して不満を懷き、何時か其扼腕を脱せんとする政黨の分子を具へて、深く下等群民の望みを縛ぎたれば、保守的國民黨の如きものなりき。之に次で勢力ある者「サドカイ」派にして、舊約以外の習慣儀文を守るに足らずと爲すものにして、神官法教師の一群より成りて、當時の朝廷に賁縁する豪族高官の徒多かりしかば、自然に放縱なる生活を愛するものにして、歡樂の中、日を送らんとすること、「パリサイ」派の儀文を重んずるものと相反對するのみならず、其

地位を有するもの多くして、ローマに對して抗戰するの得策よあらざるを以て、自然に事大黨と目せられたりき。此の如く「ハリサイ」の氣概あれども、固陋頑冥にして、死したる歴史と、儀文を見て、國家此よりありとなし「サドカイ」は敏捷にして、事理に通ずれども、放縱怠慢にして、一國の自由回復の爲めに戦ふの氣概なきより、心あるもの、自然に當時の社會を厭ふて、通世の念を發し、相率へて「エッセテス」派に入りて、死海の邊に退きて、祈禱と黙思に日を暮らし、修養と稱し、己を潔ふせんとする厭世教も走れり。此三黨の此の如くして相争ひ、人民歸向する所を知らずなりき。

此の時に方りて「エッセテス」派ならずして、死海の邊に退き己を修め弟子を教ゆるものありしが、其中に祭司「サカリヤ」の子なる「ヨハナ」なるものありき。彼もまた敬虔にして、上帝を信するの民にして、深く救主の來

らんことを待ちたりしが、今や人民惶々として、喪家の犬の如くなるを見て、深く天命人心の在る所を求めしが、其中自から「ナザレ」に生れたる耶蘇こそ、誠に此民を救ふべしとの信仰を生じ、其降誕の奇跡を聞き、其品性の發達を耳にする。従ふて、愈よ此信念を強くしたれば、暗黒の中よ一点の光明を認めたる心地せるより、是れ正に舊約に於て、預言者「イザヤ」の書に「呼ばはるもの、聲きこゆ、曰く、汝等野にて「エホバ」の途を備へ、沙漠に我等の神の大路を直くせよ。諸るくの谷のたかく諸るくの山と岡との低くせられ、曲りたるの直く、崎嶇の平かにせらるべし。此くて「エホバ」の榮光現われ、人皆な共に之を見ん。福き音を「シオン」に傳ふる者よ。汝高山よ上れ。喜き音を「エルサレム」に傳ふる者よ。汝強く聲をあげよ。聲を揚げて怒る、勿れ「エマ」の諸るくの邑よつげよ。汝の神きたり給へりと」とあるの時なるべしと信じ、慨然として起つて、萬民の罪

を數へて曰く「天國の近づけり、悔い改めよ」と、此よ於てかユダ王國の民及びエルサレムの人々群を爲してヨハ子よ來り、ヨルダン河の邊にて彼より洗禮を受けたり。彼の駱駝の毛衣を着け、腰に皮帶をつかね、蝗蟲と野蜜を食ひしが、洗禮を受んとて群がれる民よ告げて曰く「嗚呼、蛇の裔よ、誰が爾曹に來らんとする怒を避べきを告しや、然ば改悔に符る果を結べし。爾曹心よ我儕が先祖にアブラハム有りと意ふこと勿れわ。爾曹に告ん、神の能くこの石をもアブラハムの子と爲らしむべし。今や斧を樹の根に置く故に、凡て善果を結ばざる樹の伐れて、火に投入らる、也。と意氣激越沈痛よして舊約に於けるエリヤ、エレミヤ等の大預言者の風采も、想像さる、ものあり。且群民救主を懷望するの時なれば、み赤心にヨハ子の即ち救主あるべきかと付度せり。ヨハ子之に答て曰く「我の水を以て洗禮を爾曹に施へり、我より能力ある者きたらん。我の

其履帯を解にも足す。彼の聖靈と火を以て洗禮を爾曹に施はん。手にの箕を持て其禾場を潔め、麥の歛て其藏にいれ、穀の滅ざる火にて焼くべし」と。彼とは何者を指す乎。彼の遂に來れり、彼との何者ぞ。ナザレの耶蘇是也。此時耶蘇の正よ三十歳なりき。

耶蘇の何者たる乎。已に之を説けり。彼の救主として起たんとして休徵を待てり。今やヨハ子の其前驅となりて道を潔め、以て彼の起つを待てり。休徵已よ見へたり。此に於てか耶蘇の遂に救主として起ち、先づヨルダンの邊に至てり。ヨハ子より洗禮を受けんとす。夫れ耶蘇の救主也。教主の如何にして預言者より洗禮を受けんとする乎。耶蘇とヨハ子の言の能く之を説き明せり。ヨハ子曰く「我の爾より洗禮を受くべきものあるに、爾反つて我よ來る乎。耶蘇答て曰く「暫く許せ、此の如き善き事の我儕の盡すべき事也」と。耶蘇の仮令其身の如何なるも、今や人よ生れて道

を傳ふるに方つて、世の正しき儀式の守るべきこと、信じたり而して
ヨハ子も遂に之を許るし、洗禮を施して後、人に語りて曰く、我來りて彼
は洗禮を授くるは、彼をイスラエルの民に顯さんがため也、われ聖靈の
鴿の如く天より降りて、其上に止まるを見たりと。

抑も聖靈なるもの、神學上の言語を以て説明すれば、父と子と共に、一
體の神を作る、三位一にして、俗語を以て譬へなば、猶ほ人に靈魂ありと
云ふが如く、神の靈魂とも説明すべきもの也、また其作用に就きて云ふ
は、神の力とも云ふべきものにして、其父なる神は對するの關係の光線
の太陽に於けるが如く、焔の火に於けるが如く、蒸發氣の水に於けるが
如し、抑も吾人人類の肉體の天地万物のため、圍繞せらるゝが如く、吾
人の靈魂の天地を掩有し、其大に至らざるなく、其廣に至らざるなき上帝に
圍繞せらる。吾人の肉體の手足觸感によりて、天地萬物を感ずるが如く

吾人の肉體の、心理學に於て概念力と稱する力によりて、上帝に感ず。而
して此力を通じて、吾人の靈魂に入り來るもの、これ神託として、此神
託を持ち來すもの、即ち神の靈ある聖靈也。即ち友人と相語つて相解
し相感するの言語の力にあらざりて、友人の靈と、我の靈との交通する
が如く、我と上帝との交通の、我靈と上帝の靈との交通あり。

抑も三位一體の説たる古來の議論なりと雖も、深奥玄妙にして明白に
之を解すべからず。即ち之を解すべからずと雖も、上帝なる者あると共に
に上帝の靈の、人の上に作用を及ぼすこと、其遣せる救主の存せるこ
と、の事實の上に於て争ふべからざる顯象也。故に學者之を名けて三
位一體と云ふのみ。已に聖靈の靈體也。ヨハ子も現はれたりと云ふもの
これヨハ子の靈の眼に映えたるものならざるべからず。抑もヨハ子の
固より耶蘇の教主たるを信するものなりと雖も、此の如き象あるにあ

ふての愈よ其信仰を固ふせしからん。故に耶蘇の洗禮を受けたる翌日
 耶蘇の歩行するを見て、神の羔を見よと云へり。此に於てか、其傍にあり
 し、二人の弟子、直ちよ去つて耶蘇に従ひ來りしが、後來十二使徒の一人
 たりしアンデレの、其一人よして、其兄弟ペテロをも伴ふて耶蘇に仕へ
 しめたり。其翌日耶蘇ガリヤに去らんとして、途にピリボなるものに
 道を説きしかば、彼の直ちに其弟子となれり、これ耶蘇の最初の傳道者
 りと雖も、彼等は固より其驚くべき奇跡と、ヨハネの證言とを聞き、已
 に信ぢたれば、耶蘇の彼等を服すること、必ずしも長き説教を要せず。且
 つ未だ耶蘇に反對するものなく、毒言を以て之を傷くるものなきより
 一言の下よして之を服せしならん。

第五 初めて奇蹟を示す〇四十日の斷食〇心中の大争闘〇生涯
 の大時期

已よして耶蘇が洗禮を受けしより、第三日にしてガリヤの邑、カナに
 て或る民の婚姻の饗應を爲すものありしが、耶蘇の人類の救主として
 其名近隣に響きければ、村人の質朴なる、此教主の平易にして近づくべ
 きを喜び、恰かも通常の法教師を招くが如くして、其席に請せしかば、耶
 蘇の其弟子、其母と共に婚筵に列したりしよ、中頃よして葡萄酒盡きけ
 れば、母、耶蘇よ向つて彼等よ葡萄酒なしと云へり。蓋し此母の耶蘇を尊
 重すること幾何ぞ、其生る、や奇蹟あり其ヨハネよ遇ふや奇蹟あり、其
 自ら居る所の父なる神の子也。去れば、其能力を以て奇蹟を示し、民の尊
 信を起さしめんと、其傍より日夕に望む所よして、教主を愛するの敬
 虔と、子を愛するの慈愛と、兩者が相合して、其傳道の最初に於て奇蹟

を示めさんことを望むの其誠の情なりと雖も、耶蘇の私情の故を以て其超自然の能力を示めずを善とせず。顧みて答て曰く「婦よ爾と我と何の關與あらんや。我時の未だ至らず」と。其意、教主の事業を初むるに方つて、我の最早や人の子たらず、我の私情を以て奇蹟を示さず、奇蹟を示すべきの時至らば、自から示すべしと云ふもの也。已にして耶蘇四五斗も入るべき六個の石甕ありしを見て、僕等に命じて之に水を湛へしめ、更らに之を汲みて、婚筵の司會者よ送らしめしよ、其味の即ち酒の如くなりしかば、司會者の其故を知らず、新郎を呼びて曰く「凡そ人のまづ旨酒を造めて、酒酣なるに及びて、魯酒を出すに、爾の旨酒を今まで止めおけり」と、之を稱賛したれども、其何人の能力なりしかを知らざりき。これ耶蘇が奇蹟を行ふの最初にして、之より後ち、或の癩病を愈やし、或の神經病者を愈やし、或の舟なくして海よ浮び、或の少量のパンを以て

多くの人を養ふ等の奇蹟ありしと雖も、其實奇蹟ならずして通常のことと過ぎず、其前後の關係の明ならざるより、奇蹟と見ゆるものあらん或と眞に奇蹟なるものあらん。譬へば舊約聖書に於てモーセが幾十萬の民を率ひ、紅海を渡りて歐洲に入る時、紅海の水忽ち分れて二ツとなり、人馬安らかに其上を渡りしと云ふが如き、當時は於ての眞に奇蹟の如くありと雖も、紅海の水が干満よりて自ら分るゝものよして奇蹟にあらず。思ふに自然の出來事にして、奇蹟の名を得しもの此の如きこと少からざりしならん。或のまた耶蘇を信すること篤きより、耶蘇の力によりて、必らず己の病を愈やすを得ると信じて、愈ねたる神經病者ありしからん。或の眞に耶蘇の異能によりて、自然法以外の出來事ありしならん。今其の奇蹟よつきて一々辯明するの便を得ずと雖も、余の讀者に向つて第二章耶蘇降誕の時よ於ける奇蹟論を繰り返すを憚らず。曰

く宇宙の奇蹟多し汚濁なる人類の中に耶穌の生れしこと、それ自身
已に奇蹟あり。人類の動物は殊なれる進化を爲すこと已に奇蹟也。奇蹟
の疑ふべきはあらずと。

已にして耶穌の退きて野に入り、黙思祈禱の業を爲さんとして、四十日
の斷食を爲せり。聖書に之を記して曰く

『偕て耶穌聖靈は導かれ、悪魔に試られん爲に、野に往り、四十日四十夜
食ふことをせず、後うゑたり、試むる者かれに來りて曰ける、爾もし
神の子ならば命を以て此石をパンと爲よ。耶穌答ける、人のパンのみ
よて生るものゝあらず、只神の口より出る凡の言に因と録されたり
是は於て悪魔かれを聖京に携へゆき、殿の頂上よ立せて曰ける、爾
もし神の子ならば、己が身をを下へ投よ。蓋なんぢが爲よ、神その使等よ
命せん、彼等手にて支へ、爾が足の石は觸ざるやうすべしと録されたり

り。耶穌彼よ曰ける、主たる爾の神を試むべからずと亦録せり。悪魔
のまた彼を最高き山に携へゆき、世界の諸國と、その榮華とを見せて
爾もし俯伏して我を拜せば、此等を悉くおんぢに與ふべしと、耶穌彼
に曰ける、悪魔よ退け、主たる爾の神を拜し、惟之にのみ事ふべしと
録されたり。終に悪魔かれを離れ、天使たち來り事ふ。

是れ從來、耶穌の傳記者が、輕々しく見るの一事なりと雖も、實に耶穌の
生涯に於ける一大時期よして、殆んどヨハネに洗禮を受けたるよりも
大なる時期たりしや疑ふべからず。蓋し耶穌が其教主たるの天職を有
するや、固より疑ふべからずと雖も、彼れ今や人の肉を受けて來れり。人
の情を具へて來れり。豈に喜怒哀樂の感なからんや。彼の固より一點の
罪あかりき。人類の罪の血の如く紅なるも、彼れ雪の如く白かりき。然れ
ども彼の胸中よ於て、感情の争闘あるに遂に免れざる也。彼の知らず、識

らず、救主たるの品性を發達し來れり。彼れ自ら期せずして、救主として現われたり。然れども彼の天國なるもの、如何なる天國ありし乎。恐るゝ其胸中に於て相争ひしものならん。彼の王國のイスラエル人民の望むが如く、政治的の王國あるべき乎。救主とのマツヂが文武の權を取りしが如く、國帝の位にあるもの乎。抑もまた人民の望に反して、人の胸中よ存し、來世よ渡るの天國なるべき乎。哀の人となり、人よ辱めらるゝの救主あるべき乎。彼の胸中よ、イスラエル人民の望を滿たすの愉快なりと告ぐる惡魔の聲ありしならん。また否な、汝の天國の此世よあらずと告ぐる天使の聲ありしならん。マツヂの位に上るの榮譽なりと告ぐる惡魔の聲ありしならん。然れども汝の天職の然らずと告ぐる、天使の聲ありしならん。彼の榮譽と快樂ある生活を勤むるの神女と、辛苦にして艱難ある生活を勤むるの神女と、夜半交も榮傑ヘルキウルスを誘ひ

しと云ふが如く、其大説教を初むるの前よ方つて、其天國と救主との理想につきて一大争闘を心中に惹き起せしならん。是れその四十日の斷食を爲したる所以ならん。若し彼よして惡魔の誘ふ傾かん乎。彼の數十萬の人民に擁せられ、大革命家として京城に入り、羅馬の軍卒を追ふて一大戦争を爲せしならん。之と共に千九百年間の歴史の恐らくの光明を止めざりしならん。然れども彼の天國の榮華の國にあらずして、正義の天國なりと決せり。彼の王位の宮殿の中よあらずして、心中の王位なりと決せり。彼の斷乎として惡魔を退けたり。此に於てか耶蘇の花畑の完全圓滿に發達せり。

然れども耶蘇が此の如き煩悶、此の如き感情の争闘ありしを以て、耶蘇の神性を累のすと思ふ勿れ。上帝の思想の顯象なる此宇宙の日々夜々よ進化しつゝ、あり。耶蘇も其神性の完全に達するまでに、争闘あらんこ

との是れ固より上帝の意匠ならんのみ故に四十日の断食の何事よりも耶蘇の發達より取りての一大時期と云ひざるべからず彼の耶蘇の目的の地上の天國にありと云ふもの、此大時期に於て彼の目的決定したりしを看過するもの也

第六

耶蘇第一回の入京○神殿を清む○ニコデモに天國を説く○耶蘇の教の天人調和にあり○其傳教の特質

斯くて耶蘇の已にアンデレ、ペテロ、ピリポの三弟子を得たりしが、後またヤコブなる者と其兄弟ヨハナなる者が海岸にありて網をつくるふを見て之を招きしかば此二人もまた彼に従ひぬ此より耶蘇の弟子を携へてカペナウムに至り到る處安息日に會堂に入りて其教を宣べしに人々みち駭き合へり蓋し其云ふ所學者の論説の如くならず蕭々堂々

々として權威を有するもの、如くありたれば也此くて猶太人が一年一度京城に上るべき逾越節近づきければ諸方の民の群を爲して陸織と京城より上りしかば耶蘇も此を機會として其教を宣べんとて京城あるエルサレムに上れり

京城の民の曾て耶蘇が誕生の後間も亦く京城に上りたる時シメチンとアンナの言によりて耶蘇の教主たるべきを聞きて大に動搖したることあり其後耶蘇が十二歳の折に法教師の間に立て問答したるを聞き其智慧に驚きたり其後預言者ヨハナが野に叫びて天國の近づきたるを報じ且つ耶蘇の即ち天國の福音を持ち來せる教主なるを説きたるを聞きたれば日夕耶蘇を見んとして待ち設けたり或る者の遠くからラヤの地より下りて之を望見し歸りて耶蘇の教を傳へたるものありしならん此くてエルサレムの人心耶蘇の入京を待つこと大旱の雲霓

を望むが如くなりし也。而して耶穌遂に來れり。彼の果して救主なりし乎。

六十

其鬻然たる音容、眞に愛の化身たるが如きものあり、其純潔なる生活の眞に天人たるが如きものあり。其舉止堂々として、天の神の如くなるものあり。見よ彼の鬻然たる音容の中に、哀みの色あるの、人類の不幸を哀む也。聞け彼の天國の福音の、何ぞぞれ樂しきや。舊約の預言の此も成就せられたり。我等の今にして、初めて桎梏の苦より逃るゝを得んと。或る者の政治的の救主として、歡迎せり。或る者の宗教的の救主として、歡迎せり。かくて耶穌ハエルサレムの神殿に上るや、萬民圍繞して、其様を見たりしが、上帝の宮の、今や虚偽なる儀文、繁雜なる禮式の巢にて掩はれ、清潔なる殿上の、商賣の所とあり、上帝に獻ぐるを名とする牛羊と、鶏とを賣るもの、養錢の兌換を爲す兌換者、所せましと宮の園の中に居る

を見たり。宮殿の中に、或の立ち、或の坐し、繁文縟禮、以て上帝を悦ばしむるに足ると信するの偽祭司あり。數萬の人民の其後に従ふこと、迷羊の道を失したるが如きものあり。是れ上帝の約束を信じて、埃及を逃れ出でたる民の子孫なるか。今や上帝を忘れて、儀文を拜すること。此の如し。嗚呼、是れ誰れの過ぞ。學者、パリサイ、サドカイの黨與が拘泥、姑息、上帝の眞相を掩ふの致す所なりと、耶穌ハ憤然として、繩以て鞭とさし、牛羊と、牛羊を賣るものと、兌換者とを追ひ出し、其錢を散じ、其案を倒し、肅然として告げて曰く、『我父の家を貿易の家となす勿れ』と。先きの鬻然たる音容に引かへ、數十萬のユダヤ人の信仰を敵として憚らず。何ぞぞれ勇烈なるや。此も於てかユダヤの民、耶穌を責めて曰く、『爾これらのことを爲すからに、我儕も何の休徴を示めずや』耶穌答て曰く、『爾曹この殿を毀て、我三日にて之を建ん』と。ユダヤ人駭視して曰く、『此の宮を建るに、

六十一

四十六年を経しに爾三日にて之を建るか』と。全都の民之を聞きて驚き、恐れ、且つ之を信せんと欲す。

當時ニメヤの知事にして、パリサイ黨ニ屬するニコデモなるものあり、極めて敬虔の念ニ富みしが、耶蘇の言行によりて、其教主たるべきを信じ、且つ來るべき天國の自ら入るを得べきものたるを信するも、猶ほ其教主の口より多くのことを聞かんことを望むの人情なれば、夜耶蘇の許に來りて曰く、『師よ我等の汝の神より來りし師なりと知る。その神若し人と偕ならずば、爾がおせるこの休徴の人之を爲すこと能はざれば也』と。是れ蓋し天國の幸福、教主の使命等たつきて聞かんと欲するものからん。然るに耶蘇の單刀直に其肺腑に入り、天國に入るべきもの、資格を告げて曰く、『誠に實に汝も告げん、人若し新たに生れずば、神の國を見ること能はじ』と。これ新たに生るゝとの必ずしも肉體の謂はあら

ず、汝の罪の緋の如く赤くとも、雪の如く白く清めらるべしと云ふが如く、靈性一變して、新らしき光を見罪になれたる心を洗ひ清むるにあらずんば、不可なりと云ふの意也。然れども我等の祖先に、モーセあり、モーセの子孫の神の救へ入るべしと信じ、天國へ入るもの、モーセの律法を守れば足ると信する、猶太的思想を有するものに、容易に靈性の革新と云ふが如き、新しき光を解する能はざるより、ニコデモの押し返して、『人はや老ぬれば、争でか復び生るゝを得んや、再び母の腹に入りて生るべけんや』と云へり。此に於てか、耶蘇の更らに其新生の意義を解して、必ずしも物質的の新生よあらずして、精神的の生れ更りを意味するものあるを説きて曰く、『誠に實に爾も告げん、人の水と靈とに由て生ざれば、神の國へ入ること能ざる也。肉に由て生るゝ者、肉なり、靈よ由て生るゝ者、靈あり、我かんちよ新に生るべきことを言しを奇とする

あかれ、風の己が任よ吹く、かんぢ其聲を聞ども、何處より來り、何處へ往
 を知ず。凡べて靈よ由て生る、者も此の如し』と。ニユデモ答て『如何で此
 事あらん乎』と曰ふ。耶蘇答て曰く『爾のイスラエルの師なるに猶このこ
 とを知らざる乎。誠は實に爾よ告げん、我儕知しことをいひ、見しことを證
 するに、爾の我儕の證を受ず。若しとれ地のことを云ふに、爾信せず、況
 て天のことを言んに、何で信ずることを爲んや。天より降り、天におる
 人の子の外よ、天よ昇りし者なし。モーセ野よ蛇を擧し如く、人の子も擧
 らるべし。凡て之を信する者に、亡ること無し。永生を受しめんが爲さ
 り』と。

蓋し耶蘇の根本の大思想の、已よ曠野の斷食よ於て決せられたり。ユニ
 ヌリヤンの大説教師ナヤンニンが説きたるが如く、耶蘇の人類の靈
 魂の偉大絶倫なるを信じ、其偉大絶倫なるや、父なる上帝の影此よ止り

其感得、其中よ存するを見て、之をして益々發達して、上帝の意の如くな
 らんしめんと欲するものにして、所謂の救との、即ち今世に於て聖靈の
 感化よよりて、此人性を革新して生れ更のらしめ。此の如くして神と人
 とを調和し、此の如くして人と人とを調和し、之より延きて來世の審判
 に於て、幸あらしめんとする也。而して彼の其靈性革新の標本として、人
 の子として生れたる上帝の愛の化身たる己を示めし、萬民をして之に
 向つて進ましめんとす。奇なる議論なく、奇ある要求なし。決して所謂の
 宗教の一派を創立すると云ふが如きものにあらざる也。ナポレオンの
 一個唯我主義の大奸雄のみ、其言固より耶蘇の價を定むべきものにあ
 らず。然れども彼れが浮世の榮華の夢、セント、ヘンナに敗れたる時の言
 は、以て此議論の助とすべし、曰く『何よキリストの神性とあ、彼が統一せ
 る王國を以て、彼れ唯一の目的を有す。』——一個人の精神の改善、良心

の清潔、靈の神聖、是れ也。汝若し耶蘇の神たるを識らざる乎。好し、余が汝
 (大將ベルトランドを指す)を撰びて、大將となせしハ、我の過也」と見るべ
 し、耶蘇ハ決して自ら宗教の開祖と云ふが如きことを望むものよあら
 ず。彼の唯だ上帝と人類との間を調和し、人類と人類との間を調和せん
 と欲するのみ。而して人類と人類と、上帝と人類とを調和するの道、只だ
 性を革新して、至善に進ましむるにあるのみ。彼の天國との此
 世にもあらず。彼世にもあらず。此世より彼世に至れり。宇宙の調和の成
 就せし所成就しつゝ、ある所これ即ち天國也。ユダヤ人の知事にして敬
 虔の心に富みたるニユデモよして、已に此の如く、耶蘇の言ふ所に通ず
 る能はず。況んや深く「パリサイ派の儀式に拘泥し、アブラハムの子孫た
 るを以て救入るを得べし」と信じたるものよ至てハ、耶蘇の云ふ所に
 惑ひざるを得ず。此に於てか、先づ耶蘇に向て反對の聲を揚げつゝ、初め

たるものハ「パリサイ」の一派也。

第七

ヨハ子、耶蘇を神子とす。ヨハ子の信仰動搖す。耶蘇ヨハ
 子を評す。安心立命の教。活ける水の説教。耶蘇の教の
 特質

斯くて耶蘇ハ激昂熱沸せる京城の民を後に見て、ユダヤに至り、天國の
 福音を陳べつゝ、ありしが、此時先きに耶蘇に洗禮を授けたるヨハ子も
 またアイノムの地もありて、民に悔改を勧めつゝ、ありき。一日其弟子ヨ
 ハ子に向つて、ユダヤの民多く去つて耶蘇よ就き、ヨハ子に来るもの少
 きを囁きしかば、ヨハ子之に答て曰く「人の天より賜ふにあらざれば受
 ること能ざる也。我は基督にあらず。惟その先に遣されし者なりと言し
 ことを證する者ハ爾曹あり。新婦をもてる者は新郎なり。新郎の友たち

て其聲を聞ひ之に縁て喜び多し我いま此喜び満ることを得たり彼の
 必ず盛んよなり我の必ず衰ふべし天上より來る者は萬物の上よりあり
 地より出る者の地より歸きその言ふところも地のことなり天より來る
 者の萬物の上よりあり彼の自ら其見しところ聞し所のことを證と爲に
 其證を受る者ありその證を受し者の印をもて神の眞なることを證す
 神の遣し、者の神の言を語る蓋神これ靈を賜ひて限量なければ也
 父は子を愛して萬物を其手より授けたり子を信する者の窮なき生命を
 得子に従ひざる者の生命を見ることを得じ且つ神の怒りその上に留
 らん』とヨハチの今猶ほ堅く耶蘇を信じて動かざりしを見るべし。ヨ
 ハチは此時、ユダヤの民に歸服せらるゝのみならず其王ヘロデの尊信
 をも博したりしが已にしてヘロデ其兄弟ピリポの妻ヘロデヤを納れ
 て妻とせんとするや、ヨハチ之を諫めて兄弟の妻を納るゝは道德の大

法に背けりと爲せしかば、ヘロデの怒てヨハチを獄に縛ぎしも、群民の
 深くヨハチに歸服するの故を以て之を殺す能はざりしが、ヘロデヤの
 深く之を怨みて、之を殺すの機会を俟てり。已にしてヨハチの獄中にあ
 りて、天日を見るを得ず、正しくして不法の縛を受くるより、皇天若し心
 あらば、必ず我を救はん」と心累ひしならん。かくて耶蘇のことに考へ及
 ばし、我果して耶蘇の天國の成らざるに先つて死すべきかなど、思ひ
 煩ふと共に耶蘇果して我が信するが如く救主ならば、何が故に我をし
 て其救の成就するを見ずして、死せしむるかと思ひしならん。此に於て
 か弟子をして耶蘇の許にゆきて問ひしめて曰く「來るべき者の爾なる
 乎。又他は待つべき乎」と、其意、來るべき救主の、即ち耶蘇なる乎。或は他に
 救主の來るものあるべき乎、と云ふにあり。耶蘇彼等に答て曰く「爾曹が
 聞ところ、見るところのことと、ヨハチは往て告よ、替者はみ、跛者のあゆ

み、癩病人は潔まり、聾者ひき、死たる者の復活され、貧者の福音を聞せらる、凡そ我ため、躓かざる者の福なり」と明かよ自ら救主たるを告げたりしが、其使歸るや、ヨハチの事を集まれる人々よ告げて曰く「爾曹何を見んとて野に出しや、風も動さる、葦ある乎。然バ爾曹何を見んとて出しや、美服を着たる人なる乎。美服を着けたる者の王宮も在り。然バ何を見んとて出しや、預言者なる乎。然りわれ爾曹よ告ん、彼の預言者よりも卓越たる者あり。夫なんぢよ先ちて道を備る我が使者を、我なんぢの前よ遣んと録されたるの、即ち是あり。誠に爾曹に告ん、婦の生たる者の中、いまだ「バプテスマ」のヨハチより大なる者の起らざりき。然と天國の最小き者も、彼よりは大なる也。「バプテスマ」のヨハチの時より、今に至るまで、人々勵て天國を取んとす、勵たる者の之を取り。それ凡の預言者と律法の預言したるの、ヨハチの時までなれば也。若しかんぢら我言を承

ることを好まば、來るべきエリヤの是あり。耳ありて聽ゆる者の聽べし」と。此の如く猶太人の天國の思想の、現世的にして預言者の大なるものヨハチにして、猶は耶蘇が即今直ちよ天國を打ち建てざるを怪しむが如く、弟子をして問はしむる程なれば、一般の猶太人が耶蘇の教ゆる所を手ぬるしと爲し、何故よ速に天國を建て、國民を他國の桎梏より救はざる乎との思想を有せしや疑ふべからざる也。此よ於てか耶蘇の長歎して曰く。

我この世を何に譬んや、童子街よ坐し、其侶を呼びて、我等笛ふけども、爾曹躍らず、哀をすれども、爾曹胸うたすと云ふに似たり。蓋ヨハチ來りて食ふこと、飲ことを爲されば、鬼に憑れたる者なりと人々言り。人の子きたりて食ふことをし、飲むことを爲れば、又食を嗜み、酒を好む人、税吏、罪ある者の友ありといふ。然ども、智慧の智慧の子よ、義と爲ら

る、也。

と、耶蘇に對する反動の此頃より已に一部の民に初まりしもの、如し、已にしてまた民の汲々として辛苦徒勞に生命を疲らして、安息を得ざるを見て、『凡て勞たる者、また重を負る者、我に來れ。我かんぢら息ません、我の心柔和にして、謙遜なる者なれば、我軛を負て我より學へ、なんぢら心に平安を獲べし、蓋わが軛は易く、わが荷は輕ければ也』と云ひ、以て安心立命の地を教ゆ。其慈眼愛賜民の苦を傷むこと、牝鶏が其雛を思ふが如くに切なるの情見るべき也。

已にして四方を遍歴して、道にてサマリヤの地を過ぎりしが、長程の疲勞よて或る井の邊に坐して息ひし、一人の婦人水を汲まんとして來りければ、耶蘇之を見て我より其水を與へよと云へり。元來サマリヤの人の歴史上の由來よて、ユダヤ人と交際せざりしかば、婦人は答て曰く、爾

のユダヤ人にして何をサマリヤの婦ある我より、飲むことを求むるやと。此時に於ける耶蘇の答の最も能く耶蘇の福音を傳ふるの方法を示せり。彼の議論せず、異を立てず、歴史を説かず、誇張せず、眼前のことより、直ちに天國の福音を説くこと、平々坦々として、日常の談話を爲すと異ある所なし。平易にして民に近づき、天の大を説くこと、農夫の田園を語ると異なるなし。茫乎として其の畔岸を知らざれども、遠きにあらざる也。浩乎として其の津涯を知らざれども、深きにあらざる也。其言ふ所の匹夫匹婦も通じ易き所、而かも行ふ所の聖人も難しとするものあり。ナヤンニング曰く、彼の其天の子たるを告ぐるも、何の感にもなくして語れり。彼が人類の救主たるを告ぐるに勞せず、勉めずと、榮傑ならずして、榮傑の談を爲すもの、擬英雄は落つ、若し他の預言者をして之を説かしめば、如何に壯大らしく、事々しく之を説くべきぞ。然れども彼直ちに婦

人に告げて、水の請求より、一轉して福音に入りて曰く「爾若し神の賜と我を飲せよといふ者の誰なるを知べ、爾われも求めん。然バ活水を爾に予ふべし」と。然れども此婦人もまたニコデモの如く、活水の喩に通せず、活水との即ち新しき命あるを知らずして、耶穌を輕んじて曰く「主よ、汲器なく、井も亦深し。爾何處より汲て其活水を有るか。この井の我儕の先祖ヤコブの予へし所なり、彼も其子も、亦畜までも、皆これを飲みたり。爾の彼よりも勝れし者ならん乎」と。此に於てか耶穌の諄々として、其天國の福音を傳へしならん。此くて其末に至りて、活水との教主の與ふる、新しき生命なることを示して「凡て此水を飲者のまた渴ん。然ど我われたる水を飲む者の、永遠かわく事なし、且わが予ふる水の、其中にて泉となりて湧出て、永生に至るべし」と云ひ、教主の神の子にして、人は教主によりて新しき生命を得て、神を拜する人の手にて作れる宮殿の中に

するを要せず。神の靈なれば、直ちに己の靈を以て神を拜すべきを説けり。此に於てか婦人の少しく徹底して曰く「基督と稱するメツシヤ(教主)の來らんことを知、かれ來らん時、凡の事を我儕に告ん」と。此よ於てか、耶穌の遂に自ら明さまよ告げて曰く「爾と語る所の我の其あり」と。婦人は大に驚きて、且つ之を信じ、走つて四方よ告げしかば、民大に集まりて、耶穌の言ふ所を聴き、其望める教主なるを信じたりき。

第八 第二回の入京の保守黨に殺されんとす。安息日の姑息論を破る。彼れ果して神の子なる乎。權化既。神人調和の大理想彼に現はれざるべからず。

耶穌の其福音を述べ初めし後、第一に入京せし以來、已に遍歴に一年を費し、今のまた逾越の節となりしかば、此に第二の入京を爲せり。

元とエルサレムの羊門の邊に「ベテスマ」といふ池あり、此池に五の廊あり、その中に病者、聳者、跛者また衰たる者亦と多く臥て、水の動くを待り。その天の使時々池に下て、水を動かすことあり、水の動くのち、先ちて池に入りし者の、何の病によらず愈ゆると云ひ傳たれば也。三十八年病たる者一人、かしこに在き、耶穌彼が臥をるを見て、其病の久しきを知らず、れに曰ける、愈んことを欲ふやと。病る者これへて、主よ水の動るとき、我を扶て池に入る人なし、我いらんとする時の、他の人くだりて、我より先に入ると云ひしかば、耶穌之を憐みて彼に曰ける、起よ床を取收て行めと、此言を聞くや、その人立刻に愈ゆ、すなわち床を取收て行めり。然るに此日の安息日ありしかば、猶太人の之につきて、物議を起せり。猶太人の七日目よ、一日の休業を爲す、上帝が世界の創造を終り、手を休めたる日なれば、人類も共に萬事を廢せざるべからずと信せり。而して其

實、衛生上と宗教的禮拜の立法より出たる、猶太の法律よして、決して之を以て、善事と必要なる事とを禁するものよあらざるを知らず。故よ彼等相集つて跛者よ向つて、安息日に床を揚ぐべからずと云ひしに、跛者の已よ耶穌を信すれば、之を聴かずして、我を愈せしもの、我よ床を擧げよと命せりと抗辯せり。パリサイ人の初より、耶穌が神殿に上りて、牛羊を賣る者と、兎銀者とを放逐せるが如き所爲に對して、屑よからず思ひ居たりき。また其名聲日よ上りて、從屬の者四方よりエルサレムよ集らんとするを見て、甚だ嫉ましく思ふたりき。然れども、彼が爲したる所の天國の福音を述ぶるのみにして、神殿より商人を追ひしが如きは、何人も抗辯すべからざることなれば、耶穌を攻撃するの機會を得ざりしに、今や、耶穌が群衆の間に於て、公然安息日の戒を破りしかば、好機乘すべしとなし、直ちに群衆を煽動して、以て耶穌に迫らしめしかば、彼等の

合従群起して耶蘇を殺さんとして進めり。これ我國の保守黨が伊勢の
 神殿に不敬を爲せりとして、立さわぐが如く、安息日の彼等が神聖視する
 ものあれば也。然るに耶蘇の思想の、即ち此に異あり。彼の十九世紀の碩
 學大儒が、二千年來の研究によりて主張するが如く、宇宙の七日の創造
 よて終るものにあらずと信じ、其思想の成就するまでの、宇宙の常に創
 造よして、常に進化するなるを信じ、かば、泰然として怒り狂ける群民
 に答て曰く『我父の今に至るまで働さ給ふ、我もまた働くなり』と。
 此より先き、耶蘇が安息日に麥畑を過るや、其弟子飢を醫さんがために
 麥の穂を食ひしを見て、パリサイ派の徒、耶蘇を責めて曰く、汝等安息日
 にあるまじきことをなすかと。耶蘇の之に答て曰く『爾等ダビデおよび
 其従者の餓しとき行し事を、未だ讀まざる乎。即ち神の殿に入りて、祭司
 の他の己および従におる者も食ふまじき、供のパンを食へり。また安息

日に、祭司の殿の内にて、安息日を犯せども、罪なきことを律法よ於て讀
 まざる乎。われ爾曹も告げん。殿より大なるもの爰にあり。われ矜恤を欲
 て祭祀を欲すとの、如何なることか。之を知バ罪なき者を罪せざるべし
 それ人の子の、安息日の主たるなり』と、また耶蘇が或る時、パリサイの會
 堂に入りしよ、一手なへたる人ありけるが、彼等耶蘇を訴へんとて、之に
 問ひけるの、安息日にの醫すことを行べき乎。耶蘇彼等に告げて曰く『爾
 曹の中よ、一の羊を有るものあらんに、若しその羊安息日に坑に陥らば
 之を擧上ざる乎。人の羊より優ること幾何ぞや。然バ安息日に善を行す
 の宜し』と。遂にその人に爾が手を伸よと曰ければ、即ち他の手の如く愈
 たり。此の如く、パリサイ派の或る者の、安息日を機械的に神聖視し、或る
 者の之を信せずして、常に耶蘇を罵かしめんとし、固つながら耶蘇に當
 らんとせるを見るべき也。然るに今やまた、重ねてエルサレムに於て、此

ことありしかば。耶穌の是ぞ、パリサイの虚文偽禮を破るの時と信じ、明
らかよ、救主の神の子にして、父ある神の千万年一日の如く、宇宙創造の
手を止めざるを説くや、彼等の神を父と云ふの神を潰すものと爲して
愈よ怒て耶穌を殺さんとせり。此に於てか、耶穌の彼等に對して稍々長
き説教を初めたり。曰く

誠に實に爾曹に告ん、子は父の行ふ事を見て行ふの外、何事をも行
ふこと能を、蓋すべて父の行ふ事を子も亦行へばなり。父の子を愛し
凡て己の行ふ所の事を彼に示す、爾曹をして奇ましめん爲よ、かの事
等より更に大なる事を彼に示さん。その父の死し者を甦らせて生し
むるが如く、子も己の意に従ひて人を生しむべし。それ父の誰をも鞠
す、審判の凡て子に委たり。是すべての人をして、父を敬ふ如く子をも
敬はしめんが爲なり、子を敬はざる者、之を遣し、父を敬はず。誠に

實に爾曹に告ん、我言をき、我を遣し、者を信する者の永生を有、か
つ審判に至らず死より生に遷れり。誠に實に爾曹に告ん、死し者神の
子の聲を聞とき來らん、今その時よなれり、之を聞者の生べし。それ父
の自ら生を有り、其如く子にも賜て自ら生を有たせたり。また人の子
たるよ、因て之に審判するの權威を賜へり。之を奇と爲こと勿、その臺
に在者みな其聲を聞て出るとき來んとすれば也。善事を行し者の、生
を得に甦り、惡事を行し者の罪を得、甦るべし。われ何事をも自ら行
ふこと能ず、聞ところ、に遵ひて審判す、我審判の公平、その我わが意を
行ふことを求ず、我を遣し、父の意を行ふことを求めばあり。もし我事
を我みづから證せば、我證は眞ならず。別よ我事を證する者あり、我そ
の我事を證する證の眞あるを知らん、なら曩に人をヨハ子に遣し、
よ、彼眞理の爲に證を作り。然どわれ人の證を受ず、此事を言、爾曹の

救れんが爲なり。ヨハネの燃て光れる燈なり、爾曹之のみて暫く其光を喜べり。我のヨハネより大なる證あり、蓋父の我よ賜て成遂しむる事すなわち我行ふ所の事、是父の我を遣し、ことを證すればあり。且われを遣し、父も我ことを證せり。爾曹いまだ其聲を聞かず、未だ其形を見ず。その道の爾曹の心よ存ざりき蓋なんぢら其遣し、者を信せざるに因て知る、也。なんぢら聖書よ永生ありと意て、之を探索、この聖書の我について證する者あり。爾曹わが所に生を得んがため來るを欲す。われ人の榮を受す。われ爾曹を知、なんぢらの其心よ神を愛するの愛あらざる也。我の吾父の名に據て來しに、爾曹われを接す、もし他の人がのが名よ據て來ば、爾曹これを接ん。爾曹の互に人の榮を受て、神より出る榮を求ざる者なるよ、何で能信することを得んや。爾曹を父に訴る者と我を意ふ勿れ。爾曹を訴るもの一人あり、即ち爾曹が待ところのモーセなり。若モーセを信せば、我を信すべし。蓋モーセ我事を書たればあり。若モーセの書し、事を信せずば、何で我言しことを信せんや。

此説教の第一、耶蘇が公衆に向て、其神の子たるを説明し、第二に、其救主として爲すべき職分を説明し、第三に、萬民の世界最後の審判に方りて基督ある耶蘇の爲に、判決を受くべきを説明したるものにして、而して之と共に、猶太の保守黨と、事大黨とを激昂せしむる第一打撃ありしかば、耶蘇の生涯に於て、記憶すべき説教の一也。

耶蘇は果して神の子なる乎。これ第一に生すべきの疑問也。日耳曼最近自由神學の首領ソイス曰く「人或は耶蘇の性情を論ずるものあり。然れども多くの只だ激しき争によりて制し得べき、自然の好悪の偏頗は、人間完全の理想を實現する所の彼(耶蘇)に歸すべからず。且つまた、實の人

を理會するより、欠くべからざる、各種血肉の混合の、彼(耶穌)の如く、己の性質に従つて生くるにあらず、全く神の意に従つて生き、萬の事、先づ己を制するを以て主とする者の、生活の、道德的形骸は於て、來らざる也。或る者のまた、彼(耶穌)の能力を、彼れ是れと論ずるものあり。然れども我等は、唯だ、彼の天職如何あるかを論じ、能ふのみ。若し耶穌よして、天職あらば、其天職を遂ぐるに必要ある能力の、必らず賦與しあるべく、欠けをらざるべき也」と。實に然り、彼の奇蹟を論ずるも、彼の教を論ずるも、歸する所の、彼の天職如何あるべからず。彼の果して神の子なる乎、自ら云ふが如くなる乎。

彼の自ら人の子と云へり。然れども之と同時に、父なる神と云へり。此人の子と云へるの、神の子よして、人として出でしものと云ふの意義あらざるべからず。若し然らずんば、萬民の皆な人の子なり。何を殊に之を

云ふの要あらんや。即ち耶穌の、自ら神の子と信する也。偕て彼が自ら神の子と信するの、彼が十二歳の折、エルサレムにて、法教師と問答せる時、父母之を戒しめしに、『我の我父の業を、務むべきを知らざる乎』と云ひしを初めとす。其後、弟子が「サマリヤにて、食を進むるや、耶穌答て曰く、我を遣ひし、者の旨に従ひ、其工を成し終る、是我が糧也」と。また曾て「エルサレムの殿堂に、猶商を叱して、我父の家を貿易の室とする、勿れと云へり。彼が神の子と信するの念、木の芽の長ずるが如く、水の湧くが如く知らず、識らず、彼の心中に生育したりしに、相異なきを見るべき也。さて彼れ自ら神の子たるを信じたるの、前後一貫、其死の場合に於ても變らざる事、此の如し。然らば即ち神の子あるもの、果して此世に存し得べき乎。

神の子、人の子として人世に現れることあるべき乎との疑問に先づて

決すべきは、神の果して、人事の上に干渉することあるかの疑問也。吾人をして機械的の神學に歸りて、宇宙大原因論を爲すことなく、只は事實につきて之を論辯せしめよ。凡そ、宇宙の創世以來、大噴火、大地震の作用を経て、人畜草木の地上に繁殖せしより此のかた如何に此地上に於て上帝の事業多きよ。水を救ふよ、火あり、火を救ふに、水あり、寒を避けんに、暑あり、暑を避けんに、寒あり。天下の事物、個々別々につきて之を尋ねれば、何ものか、皆な自ら宇宙の主人なりと思はざるものあらんや。然れど他より之を見れば、また何ものか、互に相制し相助くるものにおらざらん。日耳曼の哲人ヘゲル曰く、地の上帝の善なるを語る、見よ、凡べてのもの、凡べてに適すと、實に然るものあるなり。豈に唯だ、地上萬物の秩序のみならんや。歴史ありて以來、其大事變と稱せらるゝもの、皆以て上帝の意思の存するあるを證すべきものよらざるはなし。請ふ

其の一端を述べん乎。古今天下のこと、其驚天動地の大業より、歴史家の注意を惹かざる程の小事に至るまで、皆な合一の精神を有せざるものあらず。平和の交通の固より云ふを要せず。禍亂戦争と雖ども、仔細に之を究むれば、皆な冥々の間に、合一の意なきものあらざるあり。アレキサンドル、シノキスカン、東西の征伐、十字軍、蠻民政伐の如き、殺伐不祥の形迹を残たりと雖、其四方に散在せる異種異類の文物を相通するの一點に於て、ノイニシヤ人、平和の旅行よりも、大なりしを信するなり。或の古來文物の、常に西より東にのみ及ぶの時代あり、或の東より西のみに及ぶの時代あるを見て、の偉大ある手を以て之を招くものあるを信せざらんと欲するも、得べからざる也。更らば、一國民中の出來事を觀察し、傑英雄なるもの、事跡に至るや、上帝が人事に干渉するの跡、愈々明かなるを見る。英雄傑豪なるも

のが、一國民の間に生ずるや、固より國民熱望の凝結する所にして、突如として天外より飛び来るものゝあらずと雖も、然かも塵芥の如くに陥まれたる國民の中より、英雄豪傑の崛起する、天之を下すにあらずんば豈に能く爾るを得んや。故に何れの國民にありても、天人を下すてう權化の信念は、堅く維持せらるゝを見る。美人を以て月宮の權化とあすの日本古來の權化説が竹取物語に現れたるもの也。大詩人、大人物を以て天上遊星の人間に流落せし謫仙とあすの、支那詩人の權化説にして申呂嶽より下り、傳説列星となると云ふが如き是也。大僧、巨聖、英雄を以て佛菩薩の權化とあすの佛敎の權化説也。見よ佛敎が日本に渡來したる以來、如何に多くの權現あるもの生じたる乎。東照大權現、住吉大權現、皆かこれ佛菩薩が權りに其形を人間に現はしたると云ふ權化説の好例證也。附ふ其の虚誕不稽あるを笑ふ勿れ。それ醜汚ある大墓の頂上よも

金剛石を藏することあり。以上虚誕らしく見ゆる所の權化説も、之を駢羅し、之を比較し、之を論じ來らば、即ち一個の結論を得るものにして、上帝が人事に干渉するを證するの具とならざる乎。以上東洋的の想像談も、之を蒸餾して其真味を求むれば、カライルが「英雄あるものは、皇天上帝、其民を卒ひしめんとして下したる使にして、人は彼等の前より跪きて、其靴の紐を解かざるべからざるの運命を有す。而して宇宙の英雄崇拜の祭壇にして、彼の治亂興廢の變に、之に捧ぐる燔祭の烟も過ぎず」と云へるが如き、西洋的の英雄崇拜論とあらざる乎。兎にも角にも上帝が人事に干渉するの跡の掩ふべからず。其人事に干渉するに方つてや、英雄豪傑に特別の天職を賦與し來るゝ、また疑ふべからず。已に然りとせば、何ぞ獨り耶蘇に於て其生るゝや自つて來る所あり、其逝くや爲す所あるを疑ひんや。然りと雖も、世の所謂る英雄豪傑の多くの時代的にし

て萬世永遠に互るものにあらず。國民的にして廣く人類一般に互るものにあらず。現世的にして來世に互るものにあらず。彼等の一時一國の爲めに、豪傑たれども、萬世萬國の英雄たる能はず。これその上帝の賦與する所限あれバ也。彼等の身は、若しくは智、若しくは徳の權化たることなきにあらず。然れども之と共に、血肉の交るあり。彼等の眞理の化身たることなきにあらず。然れども之と共に罪を具ふ。彼等の地方の中心也。未だ空間と時間との中心たる能はず。彼等の一國一代の儀表たるべきも、未だ萬世人類の儀表たる能はず。宇宙をして大進化を爲さしめんは、完全なる人、完全なる社會、完全なる靈を作らざるべからず。之を作らんは、至善、至美、至高、至大ある理想的の儀標を下さざるべからず。至善、至美、至高、至大ある理想は、人類に曾て存したる乎。五六千年の歴史、遂に此完全ある理想的儀表を有せざる以上、神自ら人類の理想的儀表

を興へざるべからず。これ即ち耶穌なる權化の出づる所以にして、論理上必然の結果然る也。故に耶穌の弟子にして、最も善く耶穌を観察したるヨハナは、耶穌の事を記して曰く

「太初に道あり、道は神と共にあり、道は即ち神なり、この道は太初より神と共に在り。萬物これに由て造らる。造られたる者、一として之は由らで造られしは無し。之に生あり、此生は人の光あり。光は暗に照り、暗は之を曉らざりき。夫れすべての人を照す眞の光は、世に來れり。かれ世にあり、世は彼に造られたるは、世これを識ず。かれ己の國に來りしに其民これを接ざりき。彼を接け、その名を信せし者には、權を賜ひて此を神の子と爲せり。斯る人の血脈は由にあらず、情慾に由にあらず、人の意に由にあらず、唯神に由て生れし也。それ道肉躰と成て我儕の間は、寄れり。我儕その榮を見るに、實は父の生たまへる獨子の榮にして

恩寵と眞理よて充てり』

これ眞理大道の萬物の成生する所以の力よして、耶蘇の即ち眞理大道が、肉躰に化して世に權化せるものと爲す也。故に曰く、耶蘇の神の權化也。千九百年前に現はれたるのみならず、今日も存する也。將來も存する也。我等の理想の儀表也。日常の自然法と、詩歌的の超自然説の、耶蘇の現出よよりて、相融化せられたる也。故にシヤン、パウロ、リヒテルの『基督の傳の最も強大あるもの、最も神聖なるもの、神聖なるもの、最も強大なるものにして、其隻手を以て邦國の基礎をつるしあげ、其溝よりは數百年の流を出して、今猶ほ時代を統治する者(神)に關す』と云ひ、スピノザの、彼を以て天啓の智慧の記號と爲し、カントとシヤン、ユビの、彼を理想的完全の記號となし、シエリングとヘゲルの、彼を以て神人合一の記號と爲し、エ、エ、テの余の聖書を以て、全く純粹なるものと思ふ。何となれば此

地上に顯現し能ふ神性は、此に盡くとも云ふべき、神性的の耶蘇基督より來る所の崇高の反射の光、其中に輝けり也と云ひ、カライルの彼を以て、我々の最も神性的ある記號と爲し、『ユニタリアンのチャンニングの耶蘇の性質の、人情より説き明むべからずと爲し、ヘルデルの最高最完の意義に於ける人道の理想の、實現せるものと爲し、唯我主義の大魔王ナポレオンも聖書を携へて、彼の膝下に跪きて曰く、如何に基督耶蘇の神性の證あるよと。此の如く、論理の上と、衆人の嘆賞の上に於て、耶蘇の神の子たるこそこと昭々乎として、それ掩ふべからざる也。

其他耶蘇を以て神子と爲さるものも、また耶蘇の生涯と、徳性と、其異能とよ於て、人類以上の者たるを識認せざるもの少なし。我等の此に於てか基督の神性論者と、非神性論者との間に、彼の數千年間の哲學者を煩はしたるが如き、文字論の空争が烟烟とありて、迸發し、互に其眞相

を知らざらしむるを見る也。それ今日の哲學、心理學の争ひ、多くの眞理其物の争そのものにあらすして、眞理を代表たひやくすべき記號きごう過ぎざる文字の争也。曰く實在也。曰く虚無也。曰く意識也。曰く良心也。曰く實驗派也。曰く想考派也。其争の如何いかん強つよよく、如何いかんに長ながき。然れども仔細しさいに之を點檢てんけんし來れば、其言ふ所は大抵相似たいていせいじて、異なる所ことの文字の争まじり過ぎず。眞理の記號たる文字に、多くの意義いぎと、少なき意義いぎを含ましむるの争まじりに過ぎず。畧言りやくげんすれば、今日哲學の争論そうろんの、多くの分量ぶんりやうの争まじりたるが如きものある也。此の如く、耶穌の神性論と、非神性論との間も、同じく文字の空論くうろんのために隔へだてらるゝを見る。耶穌の神性を否定ひていするものも就つきて、耶穌の通常つうじょうの人類じんるいあるかと問とはし、彼れ容易たやすく然りと云ふ能あたはざる也。然らば神子なるかと云はし、彼れまた然らすと云ふ。それ人類じんるい以上の者と神との間まは何等なんごうの地位ちゐか存ぞんじ得えべき。人ならずんば、神子ならずざるべからず。神子からずんば、人ならずざるべからず。畢竟ひつじやう是れ神子てう文字の性質せいしやうの争まじりに過ぎざるを見るべき也。

と
う
た
た

之これに反はんして耶穌を神子とするものも、また此の如く推究すゐくわうし來らば、耶穌非神性論者も、また神性論者たるを知らず、一概いぱいに己が神性論と相異あひことあるを以て、之を攻めて異端いたんとみよとす。然れども瞳ひとみを定めて之を見よ。彼の非神性論者も、また一種いしゆの神性論者也。唯だ神性の文字の解釋かいしやくにつきて、意見を異こととするのみ。然らば即ち耶穌の果して大人豪傑たいじんごうけつの嘆美たんびしたるが如くなりし乎。請こふ彼の萬民ばんみんに教ゆる所を聽きけ。

第九

使徒の撰任せんにん○山上の垂訓すゐくん○當時の定説ていせつと、垂訓すゐくんの衝突こうつう○耶穌の教は宗教しゆきやうにあらず、哲學ていしやくにあらず、人間の大道だうだう也○宗教

此の如く、耶穌が其身分を語り、其教を明白に語ると共に、保守黨の怒り愈よ深く、其身を危くせんとするに至りしかば、耶穌は、恐らくは其心中に於て、危機の已に迫れるを知りしからん、思らく我の世にある、最早や長からざるべし、熱信、敬虔の徒を撰びて、我働を分たしむ、これ我死すると雖も、我業の遂ぐる也と。此に於てか、京を出で、ガリヤを巡遊して後、或る夏の夜カペナウムに赴き、ホツナン角てう小山に上りて、(基督傳)終夜、神に祈り、夜明けて後、其弟子中より十二人を撰びて、使徒と名づけ己と共に天國の福音を述べしめんとす。十二人の即ち、ペテロとその兄弟、アンデレ及ヤコブとヨハネ、ピリポとバルトロマイ、マタイとトマス、ヤコブとセロテ、ヤコブの兄弟のユダとイスカリオテのユダ是れ也。之より先き、耶穌の諸方を遍歴するや、從遊の徒、雲の如く、山の如く其教

を知らず、彼等の固より群民なりと雖も、其中にの位置あり、才學あるもの少なからざりき。然るに今や、使徒を撰ぶに方りて、僅に十二人限り而かも皆な卑賤にして、名もなきものより撰びし、何の故ぞ。これ天國の鍵の學問、位地、才能を以て開くべからず、熱信、敬虔の外、何ものも、之を開く力なきを以て也。神の智者をして愚からしめ、貴きものをして賤からしむ。天國は即ち万民の平等を識認するが故也。見よペテロとアンデレの、舟人にして、鹽風に吹き染められたるの外、一物を具へざるもの也。然れども耶穌が我を従へよ、我汝を以て人を漁とるものとせんと云ふや、悦びて一身を捧げて之に従へり。ペテロのガリヤ漁人の普通の性格を具へ、勇烈にして、克己自省と云はんよりの、寧ろ突進の氣質を有し、感發激昂し易く、其長所も此もあり、弱點もまた此にありき。耶穌を防がんがため、先づ劔を抜きたるもの、彼にして、耶穌の死後、周章て、耶穌

を知らずと云ひしものも、また彼ありき。然れども一たび耶蘇復活の姿
 を見るや、熱涙を灑ぎて、之を悦びたるものもまた彼なりき。彼の此の如
 くして、其生涯を通じて、毎朝其習て耶蘇を知らずと云ひし時に、疾に起き
 熱涙を流して祈禱し、以て其罪を謝せりと云けれ、其十字架にかけらる
 や耶蘇の如くして死するの價なきものとなし、自ら十字架上に倒懸し
 て死せり。以て其熱信勇烈の氣象を見るべき也。其兄弟アンデレに至り
 て、多く知れずと雖も、其耶蘇の死後、シシヤンの地に傳道したるの故
 を以て、魯國の之を以て其國に屬するの使徒として誇り、其足跡また小
 亞細亞、ギリース地方に遍ねくして、遂にアカヤの地にて十字架に懸ら
 れしを見れば、其勇毅義烈の風、また略ぼ察すべき也。ヤコブとヨハ子に
 至りて、之を全く之より異あり。彼等のペテロの如く、容易く信せざるが故に
 容易く變せざる也。容易く激せざるが故に、容易く靜まらざる也。彼等の

内に、烈火の如き情炎を有すれども、外に、温情、靜舒、容易く迫らず、然
 れども其一たび決心するや、山をも夷げずんば已まざるの氣象を有す
 故に耶蘇之を名けて雷霆の子と云へり。耶蘇を信せざる村落に天の火
 を下さんと欲したるの、彼等なりき。而して使徒の中、先づ迫害を蒙りて
 殉死したるのヤコブとして、千艱萬難を経て、使徒の最後まで生き残り
 しもの、ヨハ子なりき。ヨハ子の、固より他の使徒より劣らざる猛烈の氣
 象を有したれども、彼の深く耶蘇の愛心に化せられたり。他の使徒の耶
 蘇に於て、萬民を審判するの義者を見たり。ヨハ子は彼に於て、萬民を愛
 するの慈父を見たり。他の使徒の彼に於て、萬民を叱咤する秋霜烈日の
 威を見たり。ヨハ子の彼に於て、萬民の爲め、嘆くの涙を見たり。此の如
 くして、ヨハ子の深く耶蘇の愛心を味ふて、愛の福音を傳へたり。
 使徒の中最も著しきもの、セロデ也。彼の所謂る保守黨に屬し、猶太の

舊慣舊風を墨守して更らず。其一點一畫を犯すもの、罪人なりと信じたり。彼のローマ人が神の靈地なる、エルサレムの地を臨むの、上帝の榮を汚すものなりとあし、愛國者を集めて、以てローマ人と一戦せんとするもの也。而して今や一變して耶蘇の使徒となり、他の奇なく、平々諄々として、天國の福音を述ぶるを以て榮とせり。此の外、ピリポの兵車の挽手也。バルトロマイの牧羊夫也。マタイの收稅吏也。而してヤコブとトマスの外、皆な妻子あるものなりき。以て其中年の徒たりしを見るべし。使徒の出身、大概此の如し、然る所以のもの、何ぞや。

多くの人は耶蘇を來れり、多くの弟子らしきものは、耶蘇を從へり。然れども耶蘇の容易よ之を受けざりし、驚くべきことなりき。見よ、ニコデモの曾て耶蘇に來れり。然れども、彼の天國に入るは、先て、鹽の更生を爲さ、いるべからずと告げて、其熱心を冷やすが如きことを爲せり。或る學者來りて、師よ何處へ往き給ふとも、我從ひんと云ふや、耶蘇の容易よ之を受けずして、先づ其事の難きを説きて曰く、狐の穴あり、天空の鳥の巢あり、然れど人の子の枕する所なしと。又或る一人、主よ爾に從ひん、先ゆきて家人に別を告ることを容せと云ふや、耶蘇の之を答て、手を擧に着て後を顧る者、神の國に當ざる者なりと云ふ。以て其弟子として人を受くるの門、極めて狭かりしを見るべき也。此の如きもの、何ぞや、權變術、數の士の、容易に之を入る、と雖も、併かも天國の決して權變によりて入れられたる、半信半疑の徒よりて建らるべきものにあらざるを信すれば也。且つ彼の學者の如き、位地あるもの、如き、各々已に偏癖と重荷とを有して、坐作進退に自由からざるものあり。耶蘇曾てカイマの民の不信を責めて曰く、「天地の主なる父よ、此事を智者達者よ隠して、赤子に顯したもふを謝す。父よ、それ此の如し、聖旨に適るあり」と。彼れ固より

世の改造の智者學者の方にあらずして、只だ天に忠あるもの、方よよ
るものなると信じられたれ也。

かくて使徒の撰任終るや、耶蘇使徒を携へて山を下り來れば、數萬の群
民の夏の熱さをも厭はず、肩を相磨して、山下に臨集し、飢ゑ渴くが如く
上を望んで、耶蘇を待ちつゝあり。耶蘇の已に使徒を撰任せり、今や其天
國の思想を述ぶるの時也。此よ於てか口を開きて、有名なる山上の垂訓
あるものを述ぶ。

『心の貧き者の福あり、天國は即ち其人の有なれば也。哀む者の福なり
其人の安慰を得べければ也。柔和ある者は福あり、其人は地を嗣こと
を得べければ也。饑渴ごとく義を慕者の福なり、其人の飽ことを得べ
ければ也。矜恤ある者の福あり、其人の矜恤を得べければ也。心の清き
者の福なり、其人の神を見ことを得べければ也。和平を求る者の福な

り、其人の神の子と稱らる可ればなり。義ことの爲に責らるゝ者の福
なり、天國の即ち其人の有なれば也。我ために人なんぢらを誦詠、また
迫害、いつはりて各様の悪言をいはん、其時の爾曹福なり、喜び樂め、天
に於て爾曹の報賞おほければ也。その爾曹より前の預言者をも如此
せめたりき。

爾曹の地の鹽なり、鹽もし其味を失ひ、何を以か故の味に復さん、後
の用なし、外に棄られて人に踐るゝ而已。爾曹の世の光なり、山の上に
建られたる城は隠ることを得ず、燈を燃して斗の下におく者なし、燭
臺よ置て家よ在すべての物を照さん。此の如く人々の前に爾曹の光
を輝かせ、然れば人々なんぢらの善行を見て、天に在す爾曹の父を榮
むべし。

われ律法と預言者を廢る爲に來れりと意ふ勿、われ來て之を廢るよ

非ず成就せん爲なり。われ誠まことに爾曹にらうに告ん天地の盡つぎざる中に、律法の
一點一畫いちてんいちがくも遂つひつくさずして廢たることなし。是故に人もし誠まことの至微しうゐき
一を壞やぶり、又その如く人に教おしさば、天國てんこくは於て至微しうゐき者と謂いはれん、凡そ
之を行おこなひ、且人に教おしる者の天國てんこくは於て大なる者と謂いはるべし。我われんち
らに告ん、學者がくしやとパリサイの人の義たよしきよりも、爾曹にらうの義たよしきこと勝まさすべし。必ず
天國てんこくに入いること能あたじ。

古いにしへの人ひとは告こて殺ころすこと勿なれ、殺ころす者の審判さばきは干らんと言いふこと有あり、爾
曹にらうが聞きし所ところなり。然しかど我われんちらに告こん、凡みなて故ゆゑなくして其兄弟きやうだいを怒い
る者の審判さばきは干らん、又その兄弟きやうだいを愚おろし者の集議しうぎは干らん
又狂妄うれまのよといふ者の地獄ぢごくの火ひに干るべし。是の故ゆゑは爾曹にらうもし禮物らいぶつを
携たづへて壇だんに往ゆたる時とき、かしてよて兄弟きやうだいに恨うらま、ことあるを憶おも起おこさば
その禮物らいぶつを壇だんの前まへに留とどます往ゆて、爾の兄弟きやうだいと和やはらぎ、後のちきたりて爾の禮らいぶつ
物ぶつを獻けんよ。爾を訟とつふる者と偕ともに、途間とこまにある時はやく和やはらげよ、恐おそくは訟とつ
る者ものなんぢを審官しんくわんに付つし、審官しんくわんまた爾を下吏したやくに付つし、遂つひに爾の獄ひやくに入い
られん。我われまことよ爾に告こん、分釐ぶんりんまでも償しんのされば必ず其所そのところを出でる
こと能あたざる也。

古いにしへの人に告こて、姦淫けんいんすること勿なれと言いふことあるは、爾曹にらうが聞きし所ところあり
然しかど我われんちらに告こん、凡みなそ婦つまを見て色情しきじやうを起おこす者の中心こころのちゆうすでに姦
淫けんいんしたる也。もし右みぎの眼めなんぢを罪つとに陥おとさば、扶たす出して之そのを棄すよ、蓋おほ五
體たいの一ひとを失うふは、全身ぜんしんを地獄ぢごくに投入あほうらるゝよりの勝まされり。もし右みぎの手
なんぢを罪つとに陥おとさば、之そのを斷きりて棄すよ。蓋おほ五體たいの一ひとを失うふは、全身ぜんしんを地獄ぢごく
に投入あほうらるゝよりの勝まされり。また曰いふことあり、凡みなそ人ひとその妻つまを出でさ
んとせば、之そのに離縁りんげん狀じやうを與あたふべし。然しかど我爾曹にらうに告こん、姦淫けんいんの故ゆゑなら
で其妻そのつまを出す者ものは、之そのに姦淫けんいんなさしむるあり。又出でされたる婦つまを娶めとる

者も姦淫を行ふなり。また古の人に告て、偽の誓を立ること勿、かんな
 ら誓ふ所の必ず主よ遂べしと言ふこと有、爾曹が聞し所なり。然ど
 我かんならに告ん、更に誓ふこと勿れ、天を指て誓ふ勿れ、是神の座位
 也。地を指て誓ふこと勿、これ神の足発也。爾の首を指て誓ふ勿、その一
 寸の髪は白し黒すること能され也。爾曹たは是々否々といへ
 此より過るの惡より出るなり。
 目にて目を償ひ、齒にて齒を償へと言ふこと有、爾曹が聞し所なり
 然ど我かんならに告ん、惡に敵すること勿れ、人かんなの右の頬を批
 ば亦はかの頬をも轉して、之よ向よ。爾を認て裏衣を取んとする者に
 の外服をも亦とらせよ。人かんなに一里の公役を強なば、之と借に二
 里ゆけ、爾に求る者に、予へ借んとする者を卻る勿れ。

爾の隣を愛みて其敵を憐べしと言ふこと有、爾曹が聞し所なり。然
 も我かんならに告ん、爾曹の敵を愛み、爾曹を誣ふ者を祝し、爾曹を憎
 ひ者を善視し、虐遇迫害ものよ爲よ祈禱せよ。此如する、天よ在す爾
 曹の父の子とならん爲なり。夫天の父の其日を、善者にも惡者にも照
 し、爾を義き者にも義からざる者にも降せ給へり。爾曹かのれを愛す
 る者を愛する、何の報賞かあらん、税吏も然せざらん乎。安否を兄弟
 ののみ問ひ、人より何の過たる事かあらん、税吏も然せざらん乎。是故
 に天よ在す爾曹の父の完全が如く、爾曹も完全すべし。
 なんぢら人に見せん爲に、其義を人の前に行ことを慎め。もし然らず
 ば、天に在す爾曹の父より報賞を得じ。是故よ施濟を行とき、人の榮を
 得ん爲よ會堂や街衢よて偽善者の如く、徳を己が前に吹しむる勿れ
 我まことよ爾曹に告ん、彼等の既にその報賞を得たり。かんなら施濟

をするとき、右の手の爲ことを左の手に知する勿れ。如此するの其施濟の隠れんが爲あり。然バ隠たるに鑿たまふ爾の父の明顯に報たまふべし。

なんぢ祈る時に偽善者の如する勿れ。彼等の人も見られんが爲に會堂や街衢の隅に立て祈ことを好むれば誠に爾曹も告ん、彼等の既にその報賞を得たり。なんぢ祈る時は嚴密ある室にいり、戸を閉て隠れたるよ在す、爾の父に祈れ。然バ隠れたるに鑿たまふ爾の父の明顯に報ひ給ふべし。爾曹祈る時の異邦人の如く重複語を言なかれ、彼等の言かほきを以て聽れんと意へり。是故に彼等も效こと勿れ、爾曹の父の求ざる先に其需用物を知たまへバ也。然バ爾曹かく祈るべし、天よ在ます我儕の父よ、願くは爾名を尊崇させ給へ。爾國を臨らせ給へ、爾旨の天に成ごとく地にも成せ給へ。我儕の日用の糧を今日も與たまへ

我儕も罪を犯す者を我ゆるす如く、我儕の罪をも免たまへ。我儕を試探に遇せず、惡より拯出し給へ。國と權と榮の爾の窮なく有たまふ所なり。アイメン。爾曹もし人の罪を免さば、天に在ます爾曹の父も、亦なんぢらを免し給はん。然どもし人の罪を免さずば、爾曹の父も爾曹の罪を免し給はざるべし。
なんぢら斷食するとき、偽善者の如き憂容をする勿れ。彼等は斷食を人に見ん爲に、顔色を損ふ、我まことに爾曹に告ん、彼等の既に其報賞を得たり。なんぢ斷食する時の首に膏をぬり、面を洗へ。如此するの爾の斷食人に見ずして、隠れたるに在す、爾の父に現れんが爲なり。然バ隠れたるに鑿たまふ、爾の父は顯明に報ひたまふべし。
隠くは隠くさり、盗うがちて竊む所の地に財を蓄ふること勿れ。隠くは隠くさり、盗穿て竊ざる所の天に財を蓄ふべし。蓋なんぢらの財の

在ところに心も亦ある可れば也。身の光の目なり、若かんちの目瞭かならば、全身も亦明なるべし。若なんちの目眩らば、全身暗かるべし。是故、爾の中の光もし暗からば、其暗こと如何に大からず乎。人の二人の主、事ること能ず。蓋これ悪かれを愛み、此を親み、彼を疎べければ也。なんちら神と財に兼事ること能はず。是故に我なんちらに告ん生命の爲、何を食ひ、何を飲、また身體の爲、何を衣んと憂慮こと勿れ、生命は糶より優り、身體は衣よりも優れる者ならず乎。なんちら天空の鳥を見よ、稼ことなく、穡ことを爲す、倉も蓄ふることなし、然るに爾曹の天の父の之を養ひ給へり。爾曹之よりも大に勝る者ならず乎。爾曹のうち、誰か能おもひ煩ひて、其生命を寸陰も延得んや。また何故に衣のことを思わづらふや、野の百合花の如何して長かと思へ、勞す紡がざる也。われ爾曹に告ん、ソロモンの榮華の極の時、たにも其装

この花の一、及ざりき、神の今日野に在て、明日爛れ投入らるる草をも如此よ、そのせ給へば、況て爾曹をや、嗚呼、信仰うすき者よ。然、何を食ひ、何を飲、なにを衣んとて、思わづらふ勿れ。此みな異邦人の求る者なり、爾曹の天の父の、凡て此等のもの、必需ことを知たまへり。爾曹まづ神の國と其義とを求よ、然、此等のもの、皆なんちらに加らるべし。是故に明日の事を憂慮なかれ、明日の明日の事を思わづらへ、一日の苦勞の一日にて足り。人の罪を定ること勿れ、恐く、爾曹も亦罪に定られん。爾曹が人の罪を定る如く、己が罪をも定らるべし。爾曹が人を量ごとく、己も量らるべし。なんち兄弟の目よある物、屑を視て、己が目にある梁木を知ざる、何ぞや。己の目よ梁木のあるを、如何で兄弟に對て、爾が目にある物、屑を我に取せよと曰、ことを得んや。偽善者よ、先わのれの目より梁木

をとれ、然バ兄弟の目より物屑を取、得るやう明か見べし。犬に聖物を
 与ふる勿、また豕の前に爾曹の眞珠を投與る勿れ、恐く足にて之
 を踐ふりかへりて、爾曹を噬やぶらん。求よ、然バ與られ、尋よ、然バあひ
 門を叩よ、然バ開かるゝことを得ん。蓋すべて求る者、は、尋る者、のあ
 ひ、門を叩く者、の開かる可ればなり。爾曹のうち誰か其子パンを求ん
 に石を予んや、また魚を求ん、蛇を予んや。然バ爾曹、悪き者ながら善
 賜を其子に與ふるを、知、まして天に在す、爾曹の父の求る者に、善物を
 予ざらん乎。是故に、凡て人に爲られんと欲こと、の、爾また人よ、其こ
 とく爲よ、是律法と預言者なる也。
 窄き門より入よ、沈淪よ至る路の濶、その門の大きき、此より入もの多
 し、命に至る路の窄、その門の小し、其路を得もの少なり。
 僞の預言者を、謹めよ、彼等の綿羊の姿にて、爾曹に來れども、内の殘狼

なり。是、その果に由て知べし、誰か荆棘より葡萄をとり、蒺藜より無花
 果を採ことをせん。凡て善樹の善果を結び、悪樹の悪果を結べり。善樹
 の悪果を結はず、悪樹の善果を結ぶこと、能ざる也。凡そ善果を結ぶる
 樹、斫れて火に投入らる。是故よ、其果に由て之を知べし。
 我を召て主よ、主よと曰もの、盡く天國に入に非ず、唯これに入者、の我
 天に在す父の旨に遵ふ者のみ也。其日われ、語て主よ、主よ、主の名に
 託てをしへ、主の名に託て、鬼をおひ、主の名に託て、多く異能を行しに
 非ずやと云もの、多からん。其時かれらに告われ、嘗て爾曹を、知ず、悪を
 なす者よ、我を離去と曰ん、是故に、凡て我この言を聽て、行ふ者を、磐の
 上よ家を建たる、智人に譬ん、雨ふり大水いで、風ふきて、其家を、撞ども
 倒ることなし、是磐を基礎と爲たれば也。凡て我この言を聽て、行ひざ
 る者を、沙の上に家を建たる、愚なる人に譬ん、雨ふり大水いで、風ふき

て其家を撞破終に倒てその傾覆おほいなり。

此説教は平易明白にして、敢て解説を要せずと雖も、當時の社會に行れる思想習慣定説に比較し來れば一層の感覺あらん。

前にも云へるが如く、當時の民の教主を望み待ちたりと雖も、其教主の意義たるや、腐敗して政治的の大英雄とあり、此大英雄が民を卒ひて入る所の、即ち牛羊滿ち、乳流れ、快樂あり、富貴あり、イスラエルの族が萬民の上に立ちて語る所の、天國也と信せられたり。然るに耶蘇の即ち曰く正き事の爲め責めらるゝもの、福也。天國の即ち其人の有なれば也。此の如き天國の思想の夢にだも曾て存立せざりき。

當時の民の思へらく、モーセの典律を守らば、即ち罪あからんと。然るに耶蘇の即ち説きて曰く、故なくして兄弟を怒るもの、即ち審判せられんと。當時の民の姦淫の思想に於て、極めて嚴格ある定説を有したりしと雖も、實際の風儀の淫逸にして、ローマの民の如き、放縱淫荒貴婦人よして淫樂を縱にせんがために、娼婦たるものあり。然るに耶蘇の即ち曰く、婦人を見て淫情を生ずるもの、中心已に汚淫したる也。當時の民の兄弟相愛するを知らざるにあらず。然れども兄弟とのイスラエルの種屬のみにして、異邦の人の、兄弟にあらずと信じたり。然るに耶蘇の即ち曰く、安否を兄弟のみ問ふの、人より何の勝れたることかあらん。當時人非人と稱せられたる税吏も、また此の如くならずや。天の父の其愛を凡べての者に完くするが如く、凡べてのものに愛を完くすべしと。此の如くして當時に行れたる定説を覆へし、法教師の偽善を責め、最後よの即ち曰く、我れを召びて主よ主と云ふもの、悉く天國に入るよあらず。惟だ之に入るもの、我天よ在ます父の旨よ従ふ者のみ也と。民の宴安争嫉の暗夜に迷へり。今や正義の大陽の、堂々として東に出で、新

しき光を放ち來れり。天國の我胸あり。天國の小さき民の中あり。天國の此世よあらずして、我心と彼世にあり正義行れて民相愛し、天が下の國民相調和する所、神の人を愛するが如く、人の神を愛し、天人相調和する所、即ち是れ天國なりとの福音の堂々乎として、天軍の喇叭の如く述べられたり。

群民の酔ふが如くして此福音を聴けり。語終て頭を擧げて語るものを見れば、高潔秀美なる風采、慈眼愛腸、涙滴らんばかりにして、民を視ると傷むが如きものあり。而かも其言、學者、法教師の如くならず、蕭々乎たる威嚴ありて、天より命するもの、如く、直よ人の肺腑に達すれば、民愈と駭きて之を信せり。

抑も此の如き教の何の處より湧き來りし乎。其教の全世界の人類に亘りて、世界的也。人の靈性に向つて、天啓的也。凡べての人事、光を與ふるものにして、人類的也。之を社會に施せば、社會の調和とあり。之を國民の間に施せば、國民の調和となり。之を神人の間に施せば、神人の調和となり。天地人の三綱に亘りて、宇宙的也。此の如き教の如何にして、教育なく學者にあらざる者の口より、曾て此の如き思想の夢にたも存せざりし社會に生じたる乎。

或る人曰く、山上の垂訓は、プラトレスの哲學に勝ると。然れども、耶蘇の教の、決して哲學と甲乙を較ぶるものよあらず。カアライル曾て之を論じて曰く、基督教とプラトレスの哲學と比較すべからざるの猶は、完全なる詩歌と高尚なる數學問題とを比較すべからざるが如し。數學問題如何に高尚なるも自ら、數學よして、詩歌と比ぶべからず。此の如く、哲學の基督教より高きものにあらず、また低きものにあらず。自ら別種なりと論じ得て、的確動すべからず。或のまた耶蘇の教を以て、佛教

知す而して此衝突に處するの勇氣を養はんが爲め、使徒を四方に遣
ひすに先つて之に示めして曰く。

われ爾曹を遣すの羊を狼の中に入るが如し、故に蛇の如く智く、鶴の
如く馴良かれ、慎て人に戒心せよ、蓋人あんぢらを集議所に解し、又そ
の會堂にて鞭つべけれバ也。又わが緣故に因て、侯伯および王の前よ
曳るべし、是かれらと異邦人に證をなさんが爲あり。人なんぢらを解
さば、如何なよを言んと思ひ煩らふ勿れ、其とき言べき事は爾曹に賜
るべし。是なんぢら自ら言に非ず、爾曹の父の靈その衷に在て言なり
兄弟の兄弟を死に付し、父の子を付し、子の兩親を訴へ、且これを殺さ
しむべし。又あんぢら我名の爲に凡の人に憾れん、然と終まで忍ぶ者
の救ひるべし。この邑にて人あんぢらを責さば、他の邑に逃よ、我まこ
とに爾曹に告ん。爾曹イスラエルの諸邑を廻盡さる間、人の子の

來るべし。弟子の師より優らず、僕の主より優らざる也。弟子の其師の
如く、僕の其主の如ならば足ぬべし。若し人主を呼てヘルセブルと云
バ況て其家の者をや。是故に彼等を懼る、こと勿、その掩れて露れざ
る者なく、隠て知れざる者あけれバ也。われ幽暗に於て爾曹に告して
とを光間よ述よ、耳をつけて聽しことを、屋上に宣播めよ。身を殺して
魂を殺すこと能はざる者を懼る、勿れ。唯なんぢら魂と身とを地獄
に滅し得る者を懼れよ。二羽の雀の一錢にて售に非ずや。然るに爾曹
の父の許なくバ、其一羽も地よ隕ること有じ。爾曹の頭の髮、また皆か
ぞへらる。故に懼る、勿れ。爾曹の多の雀よりも優れり。然バ凡そ人の
前に我を識と言ん者を、我も亦天よ在す我父の前に之を識と言ん。人
の前よ我を識すと言ん者を、我も亦天よ在す我父の前に之を識すと
言べし。地に泰平を出さん爲に、我來れりと意なかれ。泰平を出さんと

是非す刃を出さん爲ま來れり。夫わが來るの人を其父に背かせ、女を其母に背かせ、媳を其姑に背かせんが爲あり。人の敵の其家の者なるべし、我よりも父母を愛む者の我に協ざる者なり。我よりも子女を愛む者の我に協ざる者なり。その十字架を任て我に従はざる者の我に協ざる者あり。その生命を得る者の之を失ひ、我ために生命を失ふ者の之を得べし。爾曹を接る者の我を接る也。また我を接る者の我を遣し、者を接るなり。預言者なるを以て、その預言者を接る者の、預言者の報賞をうけ、義を以その義人を接る者の、義人の報賞を受く。わが弟子なるをもて、小き一人の者に冷なる水、一杯にても飲する者の、誠よ爾曹よ告ん必ず其報賞を失はじ。

是れ其天國を立てんがために、先づ現在の定説、習慣を打破するの已むべからざるを述べたるものにして、山上の垂訓の其教の正面也。此教の其反面也。彼の愛の教を述べ、此の愛の國を建んがために、義の已むべからざるを説く。蓋し真理の單直にして、鐵棒の如し、屈曲、矯轉、自由なるべからず。父、真理を取て、而して子、従はざる乎。父子の恩愛大なりと雖も、真理の爲めよ、恩愛を犠牲とせざるべからず。我真理を取つて、仇敵、また真理を取らんか。利害感情に於て、俱不戴天の仇と雖も、相和して進まざるべからず。感情と恩愛の故を以て、真理を枉げん乎。これ真理の現在の事情の奴隸となる也。彼れ愛を説くと雖も、愛の姑息の愛よあらず。真理と合一するの愛なり。敵人と雖も、真理に従つて愛するの愛也。現在の秩序の之がために破る、も是非なし。これ真理の、秩序よりも重けれバ也。

然れども單直なる真理の、人をして愛を忘れしむるの恐あり。恐らくの之によりて人を冷ならしめん。此に於てか彼れまた其弟子に、宥恕の大

なるを教ゆ。ペテロ言て耶蘇に問ふて曰く『我幾度人の罪を赦さん乎、七度乎』と。耶蘇答て曰く『爾に七次とい言ひ、七次を七十倍せよ。是故に天國の王、その臣と會計を調んとするが如し、調べ始しとき、千萬金の負債したる者を王に曳來りし、償方なかりければ、之を命じて其身、その妻孥とあらゆる所有をみお鬻て償へと曰り。その臣ひれふして曰ける、請われを寛し給ひ、皆償ふべし。是に於てその臣の主、憐みて之を釋し、その負債を免したり。其臣いで、己より銀一百の負債したる友よ遇ければ、之を執へ喉をとり、負債を返せと曰ふ、その友足下に俯伏して、求め曰ひける、我を寛し給ひ、皆な償ふべしと。然るよ之を肯はずして、その負債を償ふまで、彼を獄に入ぬ。外の友その爲せることを見て、甚だ哀しみ、往て此ことを皆其主に告げしかば、主かれを召て曰ける、惡き臣よ。爾われに求しに因て、我その負債を悉く免したり。我なんぢを憐みし如く、爾も亦友を憐むべきよ。非ずやといかりて、負債を償ふまで、彼を獄吏に付せり。若しおのゝ其心より兄弟を赦さず、我が天の父も、亦おんぢらに此の如く行給ふべし』と。

蓋し彼の教、愛にして義也。義にして愛也。愛なれども義を離るべからず。義なれども愛を離るべからず。仁義合一、是れ人道の大本、人道の大本、是れ耶蘇の教ふる所也。

第十

耶蘇の殊に注目せる階級○天國に在るもの、性質○耶蘇の天國と、他の宗教の天國○群民、耶蘇を擁して政治上の教主たりしめんとす○弟子の反覆○保守黨、事大黨の憤激○耶蘇の死、必然の結果也○耶蘇が死を避けざるの心事○サタンよ退け。

此くて耶蘇はガリヤの邊を遍歴して、貧しきものを慰め、病めるものを愈し、諄々として天國を語りしが、其最も注目したるもの何れにありかと云ひ、最も賤しくして、且つ罪あるもの、身上にてありき。耶蘇嘗てマタイあるものが、税關あるを見て、我に従へと云ふや。マタイの悦びて之に従ひて其使徒の一人とされり。後にマタイが耶蘇を家に招きて食を共するや、當時の社會に於ての極悪非道の徒ありとて卑しめられたる收税吏、其他、世の見て以て卑しむべき不道德の徒となすもの、來りて耶蘇及び弟子と共に坐したり。此は於てか「パリサイ派の人、弟子に向て問ふて曰く、爾曹の師、何故税吏や、罪ある人と偕に食する乎」と。耶蘇之を聞て彼等も答て曰く「康強なる者の醫者の助を需めず、唯病ある者これを需む。われ矜恤を欲みて、祭祀を欲まずと云ふ。此の如何なる意か、往て學ぶべし。夫わが來るの、義人を招ぐためにあらず、罪ある人を悔改せんが爲なり」と。また「パリサイ」の人にして耶蘇を信するものあり、彼を請きて食を共にしたるに、邑の中は惡行を爲せる婦人、恐らくの賣淫婦ならんありけるが、私かよ耶蘇の後より立ちて、其足下に跪き、涙にて其足を濡し、首の髮の毛をもて之を拭ひ、且つ其足に口を接け、また香膏を之に抹れり。然るに耶蘇が敢て之を避くるの色なきを見て、主人は之を怪しみしかば、耶蘇譬をもうけて主人に告げて曰く「或債主は二人の負債人ありて、一人の金五百、一人の五十を負し、債方なかりければ、債主この二人を免たり。然らば二人の者その債主を愛すること孰か多き我も聞せよ」主人答て曰く「我ももふに免る、ことの多き者あらん此は於て耶蘇之に告げて曰く「爾が意ふところ違ざる也」と。即ち罪多きもの救はるれば、其悦大なるべきが故に、好んで罪人を受けすべきの意也。此の如く耶蘇の好んで社會より見放されたる階級に向つて、其目を注

ぎしこと疑ふべからず。然れども之と共に、其名の高く上りしも、また疑ふべからず。曾て耶蘇を殺さんと企てしヘロデ王の嗣王たるヘロデも、耶蘇の盛名と異能とを聞き、恐らくは是れ己が曾て殺したるユハ手の復活したるものにあらずやと疑ひ、ヘロデの大宰クイザの妻ユハンナ及び其他多くの婦人の、皆な其所有の財産を以て、耶蘇に奉仕したりき。以て其名の如何に深く人心に感せられしかを見るべし。故に當時猶太人を率ひ、羅馬に對して回復軍を起し、猶太人の爲めよの偶像とも云ふべかりしシメオン、其歴史に記して曰く、「此時一人の賢人、若し人と云ふを得べくば、ありき彼の驚くべき事業を爲し、且つ悦んで真理を受くるもの、主たり」と。

また弟子の中、天國の奧義に通せざるものあり。天國との榮華あり、階級あること、猶ほ王侯宮殿の如くあるべしと信じ、來りて耶蘇を問ふて曰く、天國に於て大ある者の誰ぞやと。此は於てか耶蘇の傍に在りし嬰兒を懷きて弟子の中、立たしめ、天國の奧義を説きて曰く、

我まことと爾曹に告ん、もし改まりて嬰兒の若くあらずば、天國に入ることを得じ。然らば凡そこの嬰兒の若く、自ら謙る者のこれ天國に於て大あるものなり。又わが名の爲に、此の如き一人の嬰兒を接る者の我を接るなり。然ど我を信する此小子の一人を礙かする者の、磨石をその頸に懸られて海の深に沈られん方、なほ益なるべし。此世の禍なる哉。その礙かすことをすればなり。礙くこと、必ず來らん。然ど礙を來らす者の禍なる哉。若し爾の手、なんぢの足、おのれを礙かさば、斷て之を棄よ。両手兩足ありて、盡ざる火に投入られんよりの、跛またの殘缺にて生よ入るの、善あり。もし爾の眼、おのれを礙かさば、拔出して之を棄よ。兩眼ありて、地獄の火に投入られんよりの、一眼にて生に入るの

善なり。爾曹この小子の一人をも謹みて輕するあかれ。我なんぢらに告げん。彼等が天の使者は、天にありて天に在す。吾父の面を常に觀べあり。それ人の子は亡たる者を救はん爲に求めり。爾曹いかに意ふや。百匹の羊あらん。其一匹まよはし、九十九を山に置き、ゆきて迷し一を尋ざる乎。若したづねて之を遇べ、我まことと爾曹を告ん。迷ざる十九の者より、尙その一を喜ん。是の如く、この小子の一人の亡るは、天に在す。爾曹が父の尊旨に非ず。もし兄弟なんぢに罪を犯べ、その獨ある時に往て諫よ。もし爾の言を聽べ、その兄弟を獲べし。もし聽ずば、爾三人の口に由りて證をなし、凡の言を定んが爲、一人二人を伴ひ往。もし彼等にも聽ずば、教會に告よ。もし教會に聽ずば、之を異邦人、かつ稅吏のこととす者となすべし。我まことに爾曹に告ん。凡そ爾曹が地に於て繫こと、天に於ても繫ぎ、爾曹が地に於て釋こと、天に於ても釋

べし。我また爾曹に告ん。もし爾曹のうち二人のもの、地に於て心を合せ。何事よても求めば、天に在す。吾父の、彼等の爲に之を成たまふべし。蓋わが名の爲、二三人の集る所に、我も其中に在るなり。

見よ彼の天國の如何。美として清素なるや。之を彼の佛教マホメット教の示めしたる樂天美地の思想に比すれば、實に雲泥の差あるを見るべし。マホメット教の固より基督の教に摸擬し之を加味するは、東洋の宗教思想を以てしたるものにして、其教義の耶穌の説く所より劣ること怪むに足らずと雖も、然かも信者の綠色の小鳥となりて、蜂蜜の如くは甘く雪の如く清冷に、水晶の如く明なる水を飲み、樂天に上り、一たび樂天に入れば、地上に於て妻とせしもの、美人とありて其傍にあり、美貌完備として缺點なき少女七十二人、其左右に坐して、あらんかぎりの力を盡して彼を慰むると、(マホメット傳)云ふが如きに至ては、これ樂天

とは現世の肉慾の満足せらるゝ所にすぎず。將たまた釋迦の教たる、極樂の如きも信徒の傍に、美なる天女侍坐し、伽陵頻伽の鳥の啼くありと云ふが如き、到底現世の肉慾を一段進めたるのみにして性質に於て現世の肉慾より超過するあるを見ず。之を耶蘇の説く所の天國は比す唯た千里の差違のみならざるを見るべき也。

此の如く耶蘇が群民に向つて天國の奧義を語りたること幾度乎。然れども彼等の思へらく、耶蘇の如き異能と奇跡とを示めしたる者の、靈性の天國の外、我等は何物をも與へ得ざるの道理なかるべしと、強ひて耶蘇を擁して、政治上の帝王たらしめん。其タイベリヤ湖の岸に於て、數千の人を避しが如き、明かに彼等が己を帝王たらしめんとするの勢あるを見て、之を避けたる也。約翰傳六章十五其人を避けて山に入ると云ふもの、多くと此類也。故に群民耶蘇の後を跡ねて、カペナウムにて

近づきたるとき、耶蘇の之を罵つて曰く「誠は實に爾曹に告ん。爾曹の我を尋るの、休徴を見し故は非ず。たゞパンを食して飽きたるが故なり。おんぢら壞る糧の爲に勞かすして、永生に至る糧すなはち人の子の予る糧の爲に勞くべし。蓋父の神かれを印して、證すれば也」と是に因て人々耶蘇は曰けるの、我儕如何ある事を行ハ神の工に爲べき乎。耶蘇答て彼等曰けるの「神の遣しし者を信するの、即ち其工なり」と。彼等いひけるの、我儕をして爾を信せしむる爲は何の休徴を爲して我等は示すや、何の工を行ふや。我儕の先祖野にてマナを食へり。録して天よりパンを彼等に賜へて、食しむと有が如しと。耶蘇曰けるの「誠は實に爾曹に告ん。天よりパンを爾曹は賜し者は、モーセはあらず。今わが父の、天より眞のパンをもて爾曹に賜ふ、神のパンは天より降りて生命を世に賜るもの也」と。彼等いひけるの、主は恒は其パンを我儕に予よ。耶蘇答て曰く「我の生

命のパンなり。我に就る者の饑ゑず。我を信するもの、恆に渴ことなし。然ど我なんぢらが、我を見て、も信せざることを爾曹に告たりき。凡て父の我に賜し者、我に就らん。我よ就る者は、我かならず之を棄す。わが天より降りし己の意の任を行のん爲に非ず。我を遣し、者の意のまゝ、を行のん爲なり。凡て父の我に賜し者、われ一をも失はず。末日に之を甦らすの即ち我を遣し、父の意あり。凡そ子を見て之を信する者、永生を得。われ復これ末の日よ甦らすべし。これわれを遣し、者の意なればなり。誠に實に我なんぢらに告ん。我を信する者は永生あり。我の生命のパンなり。爾曹の先祖の野にてマナを食しかど死ねり。凡て之を食ふ者をして死ざらしむる者の、天より降りるパンあり。我の天より降りし生るパンあり。若し人このパンを食ひ、窮なく生くべし。我あたふるパンの我肉なり。世の生命の爲に我れこれを賜へん」と。是れ人はパンの

みにて生るものにあらず。靈の糧を得ざるべからず。てう意義にして、己は即ち人類の靈魂の糧ありと云ふもの也。然れども猶太人の之を解する能はずして譏るのみならず、其弟子もまた之を解せずして、相譏るに至れり。而して弟子の中よ譏を起せしもの、即ちイエスカリテのユダ。恐らく其初なりしならん。彼の初より耶蘇の異能に驚きて、之よ従へり。其靈性上の天國を聞き、之を信せり。然れども彼の世才に長じたるものにして、之と共に純然たる靈性上の天國よ満足する能はず。一方よは耶蘇の教を信奉すると共に、一方よは耶蘇が政治上の教主たるべしと半信半疑しつゝ、ありしならん。然るに今や耶蘇自ら生命のパンにして人よ食ひるべしと、譬を以て之に説くや、衆民の失望すると共に、弟子の中に於てユダが最も失望せるの必然の勢なるべし。之によりて衆民の多く耶蘇を辭して去りしかば、耶蘇の其十二弟子に向つて曰く、爾曹

も亦去んと意ふや。ペテロ答て曰く、主よ我儕の誰に往んや、永生の言を有る者の爾なり。又われら信じて知る。おんちの活る神の子キリストなりと。然れども耶蘇彼等に告げて曰く、我なんぢら十二人を簡びしにあらずや。然と其中の一人の、悪魔なりと。見るべし、ユダが失望より反覆せんとするの状、已に見るべかりし也。

此の如く一分に於て、群民の耶蘇を擁して政治的現世的の救主たらしめんと迫るに方つて、一方に於て、保守黨と事大黨が耶蘇に對する嫉妬と憤怒の此時を以て其頂上に達せり。彼等の安息日を以て何事も爲すべからざる聖日と合せり。然るも耶蘇の安息日よ人を愈して憚らず、曰く安息日の人の爲めに設けられしものよして、人の安息日の爲めに作られしものにあらずと。これ安息日の意義を改めたる也。彼等思らく神のエルサレムの宮殿にありと。然るも耶蘇の、汝等靈と眞をもて

神を拜するの時至らんと。これ神の殿を神殿の外に移したるもの也。彼等思へらく、異邦人の兄弟にあらずと。然るも耶蘇の即ち曰く天の父の善きものにも悪しき者にも雨露を與ふと。これ國民人種の間の障壁を破る者也。彼等思らく、法教師の言行の、萬國の律法たるの日あるべしと。然るに耶蘇の則ち口を極めて法教師を攻む。彼等の最早忍ぶべからず其口より國法を毀たしめて、國法の罪人として、之を刑するの外なし。此に於てか「パリサイ」の人來りて、其弟子が食ふ時に手を洗はざるの古傳よ合はざるを責むるや、耶蘇却て之を責めて曰く「爾曹は亦なんぢらの遺傳よよりて神の誠を犯し何故ぞ。それ神いましめて、爾の父母を敬へ又父母を罵る者の殺さるべしと宣給へり。然るに爾曹の、凡て人、父母に對ひ、なんぢを養ふべきもの、禮物なりと云ふ、その父母を敬はずとも可と曰ふの何ぞ。かくて爾曹遺傳よより、神の誠を廢くせり。偽善者よ、

ザヤの能くさんぢらよ就て預言し此民の口にて我よ近き唇にて我を敬へども其心の遠かり人の誠を教とあして徒らに我を拜すと云へり』と。此よ於てか弟子耶蘇に云つて曰く「パリサイ」の人この言を聽て厭ふを知るかと耶蘇答て曰く「我が天の父の植ざる者のみな拔るべし彼等を棄ておけ彼等の替者の相する替者なり若めしひのものを替者の相せば二人とも溝に落べし凡そ口に入るもの腹を運びて厠に落るを未知知らざるか口より出るもの心より出これ人を汚すもの也蓋心より出る所の惡念凶殺姦淫苟合盜竊忘證謗讒此等の人を汚すものなり然ども手を洗すして食ふの人を汚さず』と。已にして「パリサイ」の人「サドカイ」と平生相嫉視するに係らず耶蘇を責めんとして聯合して來り天の休徴を我等よ見せよと云ふや耶蘇之に告げて曰く「爾曹暮よ夕紅に由て晴ならんと言ひ晨に朝紅また曇に由て今日雨ならんとい

ふ偽善者よ空の景色を別つことを知て時の休徴を別ち能はざる乎姦惡なる世の休徴を求るとも預言者「ナ」の休徴のほか休徴を予られじ』と「パリサイ」人其後また耶蘇を試みて曰く人なにの故に係らず其妻を出すの宜か答て曰く「元始に人を造り給ひし者の之を男女に造れり是故よ人父母を離れて其妻よ合ふ二人のもの一躰と爲なりと云るを未知讀ざる乎然ばはや二にのあらず一躰なり神の合せ給へる者の人これを離すべからず』と「パリサイ」人曰く然ば離縁狀を予へて妻を出せとモーセが命せし何ぞや耶蘇曰く「モーセの爾曹の心の無情に因て妻を出すことを容したる也されど元始の如此あらざりき我なんぢらよ告んもし姦淫の故ならで其妻を出し他の婦を娶る者の姦淫を行ふなり又いだされたる婦を娶る者も姦淫を行ふなり』とまたカペナウムにあるや税吏來りてペテロに問ふて曰く汝等の師の納金を出さる乎

と。耶蘇の彼等を礙せざる爲めとて、ペテロに命じ魚を採りて金を得て之を納しめたり。此の如く、彼等が難詰百端すれども罪狀を得ず、其言の茫乎として其津涯なきが如くなるに驚き、更らに他の證據を取つて、耶蘇を國法にかけんとして待てり。

此の如く、一方より「パリサイ」サドカイ「學者の徒、公然反對の同盟を組みて攻め來り、一方に於ての弟子衆民の、耶蘇を以て政治上の教主たらしめんと熱望し、而して耶蘇の口より政治上の教主たらずして靈の糧とありて人に食はるべしとの語を聞きたるもの、去つてまた來らず然れども此のことを聞かざる者の、到底耶蘇を以て政治上の教主として華々しき運動を起さずんば已まざらんとす。此の如く耶蘇の身の三種の人に取られたり。此三種の勢力の衝突の耶蘇を何の地にかかんとする乎。群民の必ず耶蘇を奉せずんば已まざるべし。然れども事大

黨と保守黨との之を抑へずんば已まざるべし。而して彼の失望せる徒の、事大黨保守黨の爪牙たらん。此に於てか耶蘇の前途の、唯だ死あるのみ。如何よして此間に處せん乎。是れまた耶蘇の生涯に於ける一大時期たり。

群民と事大黨保守黨との衝突の必然の結果の死也。然れども耶蘇の之を避くるの道なかりし乎。彼の事大黨と保守黨とが耶蘇に對する嫉妬と誤解に外ならずと雖も、群民もまた決して耶蘇を正しく解釋したるものにあらざる也。其或る者の耶蘇を以て、政治的の教主とあし、或る者の群民間に於ける此感情を利用せんとす。其耶蘇の友にあらざること、事大黨と保守黨とに異ならざる也。然らば即ち、何が故に耶蘇の此の死を避けざりし乎。思ふに耶蘇も、また肉躰に於ての人也。悲喜苦樂の情ある也。豈に其心中に於て、此感情の争闘なからんや。或る時の此死を避く

るの道なきかと求めしならん。或る時の此死の果して上帝の命なるやと疑ひしならん。或る時のまた異邦の婦人にして耶蘇を信じ、一點の疑を挟まざりしものあるを見、之をユダヤ人の頑冥不靈に比して、異邦人却て篤信忠實なるに感じ、速かに狹隘なるユダヤの地を去りて、異邦と異種とを問はず、世界萬國に向つて天國の福音を述べんかと、勇心勃々として起りしこともあらん。其死すべき運命と、前よ來る此の喜びの望とを比較して、彼れが愁然として黙思せしこと幾度ぞ。其上帝よ向つて、其命のある所を示さんことを祈りしもの幾度ぞ。而して彼れ遂に憤然として決意す。曰く一粒の麥、地に落ちて死なすば、唯一にてあらん、若し死なば、多くの實を結ぶべし。我の死するの、これ父なる神の子に命する所あり。子の神の命を遂げんがためよ來る、好し死に向つて進まん。と。彼れが死を辭せざる所以此にあり。實に四方より讚美の聲の響くとき

の彼れの心中に、實に此死の問題ありし也。故よ其將に萬民の讚美を負ひ、エルサレムよ向て、凱旋の入門を爲んとするや。弟子よ向つて其エルサレムに於て、長老祭司の長、學者等より迫害せられ、多くの苦を受け、且つ殺され、而して遂に甦るべきことを示し、初む、弟子等の皆な耶蘇と飽までも、苦難を共にせんと欲する者也。然れども見す、此の如き暗黒洞裏よ入るに方つてや、豈に其後を顧るの情なからんや。萬事に先をなすペテロ直ちに進みて、耶蘇の裾をとりて、エルサレムよ入るを援むるや、耶蘇の日頃の慈眼愛腸に引き更へ、高聲之を叱して曰く「サタンよ我後に退け。爾の我に礙く者なり。夫れなんぢらの神の事を思はず人のことを思へり」と。更らに弟子よ告げて曰く「若しわれはんと欲ふ者の己を棄て、その十字架を負て、我よ從へ。その生命を保全せんとする者の之を失ひ、我ためよ其生命を失ふ者の、之を得べければ也。もし人全世界

を得るとも其生命を失ひ、何の益あらん乎。また人なを以て其生命に易んや。それ人の子の父の榮光を以て、其使等と偕に來らん。其時おのくの行に由て報ゆべし。誠に爾曹よ告げん。人の子その國を以て來るを見るまでの、此に立もの、中に死ざる者あるべし』と。耶穌の地位此に於て一變せり。

第十一

最後の勝利の入京○弟子の心に地上の天國を望むの心を

生ず○人に長たらんとせば人の下たるべしとの教○人心

動搖、四方より京城を攻むるの趣あり○法教師等耶穌を圍

みて難問す○反對黨、耶穌を殺さんと計る○ユダ、耶穌を賣

るの心術○新しき誡

年うつりて、一年一度の逾越の節も、また近づきたれば、耶穌のまた其弟子を率ひて、エルサレムへと向ひたりしが、往くく多くの病を愈し教

を説きつゝ、進みしかば、群民四方より集まり、其の勢威、一代を傾くるものありき。此に於てか數バく耶穌より天國の奧義を聞き得たる弟子

も、また其心中に於て、或の政治的の教主たるべきの時や來ぬらんと、疑ひつゝ、初まりしもの、如し去れば已に使徒よ立てられたるヤエブと

ヨハ子の母、耶穌に來りて曰く、此二人の我子を爾の國よ於て、一人の爾の右、一人の爾の左に坐ることを命せよと。耶穌の其心中よ於て、嗚呼何

時までか迷ふかと長嘆したるならん。然れども明かに之に教へ諭して曰く『我が左右よ坐ることの我が賜ふべきよあらず。只わが父よ備られ

たる者の賜らるべし』と。而して更らに衆弟子に教へて曰く『異邦の領主の、その民を主どり、大なる人どもの、彼等の上に權を操る。これ爾曹が知

るところ也。然れど爾曹の中よては然すべからず。爾曹の中、大なる人と

ならんと欲ふ者の爾曹は役せらる、者となるべし。此の如く人の子の
 來るも、人を役ふ爲にのあらず却て人に役はれ、又おほくの人は代て生
 命を予へ、その贖とならん爲なり」と然り彼れ今や萬民の教主として萬
 民の王たり。而して萬民の爲めに役せられ、其生命を捧げんとて京城へ
 と進みつゝ、ある也。然れども萬民の之を悟らず、狂するが如くして之を
 待ち、耶蘇が驢馬に乗りて、正にエルサレムに入らんとする頃の、衆人或
 の其次を途よ布きて、教主は觸れられんことを欲し、或の木材を道よ布
 きて、教主の足は踏れんことを欲し、其前後、左右、群集、山を爲し、詩篇を歌
 ふて曰く、教主、ダヴデの裔、主の名よよりて來る者は福あり至高き處に
 救われと。一人歌へば萬民和し、其聲遠近よ響しかば、京城の民、擧つて震
 驚して曰く、これ何人ぞやと。後年に至りニロ帝の時に、逾越節に逢はん
 がため、エルサレムに入りしものを數へしに、二百七十萬人ありしと云

へ、以て其大數あるを知るべし。若し此の如き群民と、此の如き激昂沸
 熱せるに乗じて、政治的の運動を初むる者あらば、エルサレムを倒さん
 こと一朝の業のみ。故に此の群民の叫は、事大黨と保守黨とに取りてハ
 敵軍四方より攻め來れるが如くは聞えしあらん。

已にして耶蘇の京城に入るや、神殿に入りて、其中にある凡べての商人
 を逐出し、兌換者の案と鳥獸を賣る者の椅子を倒して、彼等よ告げて曰
 く、我家の祈禱の家と稱らるべしと録さる。然るは爾曹これを盜賊の住
 家となせりと。法教師と學者等、已よ耶蘇が此の如き舉動あるを怒りた
 るに、エルサレムの兒童等、また何時となく耶蘇を謳歌して、ダヴデの裔
 よ、救よと、街くは相唱和するを聞き、エルサレムの危機、已よ迫れり
 と信じ、太く憤を含みて、耶蘇を詰りて曰く、汝もまた此聲を聞くかと
 耶蘇少しも躊躇せずして、直ち舊約の詩歌を引き來つて、答て曰く、然

り、嬰兒、乳哺者の口に讚美を備へたりと録されしを、未だ讀ざる乎と。已にして耶蘇の城外に宿し、翌朝また神殿に入りて教を説くや、萬民群集して狂するが如くなれば、祭司の長と、民の長老等、相携へて耶蘇を詰て曰く、汝何の權威を以て、此事を爲すや、誰か此權威を汝に予へし乎とこれ神より與へられしと答へなば、神を潰すものなりとて、國法よ訴へんと欲する也。故よ耶蘇は直ちよ答へずして却て問を設けて曰く、「我も一言なんぢらに問ん、我よそのことを告ぐば、我も何の權威をもて之を行といふことを爾曹よ曰べし。ヨハ子のマフテスマの何處よりぞ、天よりか、人よりか」彼等たがひに論じ、若し天よりと云ば、然ば何ゆゑ信せざる乎と云ん。もし人よりと云ひ、衆民の沸騰せんことを恐れて、遂に答へて知らずといふ。耶蘇彼等よ曰ける、「我も何の權威をもて之を行ふか、爾曹に語らじ。爾曹如何よ意ふや、或人二人の子ありしが、長子よ來り

て曰ける、子よ今日わが葡萄園に往て働け、答て否と曰しが、のち悔て往たり。また次子よも前の如く曰けるに、答て君よ我往べしと曰しが、遂に往ざりき。此二人のもの、孰か父の旨に遵ひしぞ」と衆民異口同音よ答て曰く、長子あり。此に於て耶蘇彼等に告て曰く、「誠に爾曹に告げん、税吏および娼妓は、爾曹より先に神の國よ入るべし。夫れヨハ子義しき道をもて來りしよ、爾曹これを信せず。税吏娼妓は之を信じたり。爾曹これを見て、なほ悔改めず、彼を信せざりき」と。これ明かに法教師と學者とを罵りしものなれば、祭司の長と、パリサイの徒の、憤然として耶蘇を執へんとせしが、衆民の己を攻めんことを恐れて、猶ほ未だ敢て手を下さりき。

耶蘇の後よ、數萬人の熱心、楯となりて扣へたれば、彼を執ること容易ならず。然らば口論の上よ於て、彼を國法に觸れしめ、衆民の憤を出さし

めんと。祭司の長と長老等の「パリサイ」の人、ヘロデの黨とを遣ひして、耶蘇は言ひしめて曰く、師よ爾の眞なる者なり、眞をもて神の道を教へ、また誰よも偏らざることを我儕の知る。その貌に由て人を取ざれば也。然らば貢をカイサルに納るの善さや、悪さや、爾いかよ意ふか。我儕に告げよと。これ耶蘇若し貢を納るゝに及ばずと言はば、國法よ訴へんと欲せる也。耶蘇答へて曰く「偽善者よ、何ぞ我を試むるや。貢の銀錢を我に見せよ」彼等「デナリ」を耶蘇に携來りしに、直ちに告げて曰く「此像と號の誰か」答てカイサル也といふや、耶蘇彼等にいひけるの「然らばカイサルの物のカイサルよ歸し、また神の物の神に歸すべし」と。

「パリサイ」の人、已にヘロデ黨と共に、耶蘇を屈服せしめんして成らずと聞くや、「サドカイ」の人、耶蘇に來りて難問を發して曰く、師よモーセの云るに、人もし子なくして死なば、兄弟その妻を娶りて、子をうみ、兄弟の後

を嗣すべしと。茲に我儕の中に、兄弟七人ありしが、兄めとりて死し、子なきが故に、其妻を次子に遺れり。その二、その三、その七まで皆な然す。後つひに婦もまた死たり、魅るときは此婦七人のうち、誰の妻と爲るべきか。これみよ、彼を娶しものかれバ也と。耶蘇また直ちよ答て曰く「爾曹聖書をも、神の能力をも知らざるに由て、謬れり。それ魅るときは、娶らず、嫁す天よある神の使等の如し」と。言下よ之を折服せり。

「サドカイ」派も、また耶蘇に折服せられたりと聞くや、「パリサイ」派の如何にもして、耶蘇を言ひ誤らせんと、相會して評議しけるが、其評決により一人の法教師進みて耶蘇に問ふて曰く、師よ律法のうち、何の誡か大なるか。耶蘇答けるの「爾心を盡し、精神を盡し、意を盡し、主なる爾の神を愛すべし、これ第一よして、大なる誠あり。第二も亦これに全し、己の如く爾の隣を愛すべし、凡べての律法と、預言者は、此二の誡によれり」と。此の如

く彼等の交るゝ進みて難問を發するや、一々直ちに論破せらるゝの
 みあらず、其言ふ所新奇よして、而かも理の當然なれば、彼等の痛く驚き
 て、呆然たるのみ。彼等已に驚きて其口を噤するや、耶穌の優然として、立
 ちて、事大黨と保守黨に對する、攻撃の態度を取りて、説教を初めたり。
 學者とパリサイの人のモーセの位に坐す、故に凡て彼等が爾曹に言
 ところを守て行ふべし。然と彼等が行ふ所を爲こと勿れ、蓋かれら
 言のみよして、行はざれば也。また彼等の重かつ負がたき荷を括て、人
 の肩に負せ、己の一の指をもて之を動すとすら好まず。彼等の行ひ凡
 て人よ見れんが爲よする也。その佩經を幅濶し、其衣の裾を大にし、ま
 た筵席の上座、會堂の高座、市上の問安、人々よりラビラビと稱られん
 ことを好む。爾曹はラビの稱を受ること勿れ、蓋なんぢらの師の一人
 すなわちキリストなり、爾曹のみな兄弟あり。また地にある者を父と

稱ること勿れ。爾曹の父の一人すなわち天に在す者なり。また導師の
 稱を受ること勿れ、蓋なんぢらの導師の一人すなわちキリストあり
 爾曹のうち天なる者の、爾曹の僕と爲るべし。凡そ自己を高する者の
 卑せられ自己を卑する者の高せられん。
 噫なんぢら禍あるかな、偽善なる學者と、パリサイの人よ、蓋なんぢら
 天國を人の前よ閉て自ら入す、且いらんとする者の入をも許さざれ
 ば也。噫なんぢら禍なるかな、偽善なる學者と、パリサイの人よ、蓋なん
 ぢら娼婦の家を呑いつのりて、長き祈をなす、之よ由て爾曹最も重刑
 を受べければ也。あゝ禍あるかな、偽善なる學者と、パリサイの人よ、蓋
 なんぢら偏く水陸を歴巡り、一人をも己が宗旨に引入んとす、既に引
 入れば之を爾曹よりも倍したる地獄の子と爲り、噫なんぢら禍なる
 かな、智者なる相よ、爾曹のいふ、人もし殿を指て誓ひ、事なし、殿の金

を指て誓のい背べからずと愚にして替なる者よ、金と金を聖からし
 びる殿とは孰か尊き又いふ人もし祭の壇を指て誓のい事なし、其上
 の禮物を指て誓のい背べからずと愚にして替なる者よ、禮物と禮物
 を聖からしむる祭の壇との孰か尊き、それ祭の壇を指て誓ふ者、祭
 の壇および其上の凡の物を指て誓ふなり、また殿を指て誓ふ者、殿
 および其内は在す者を指て誓ふなり、また天を指て誓ふ者、神の寶
 座および其上に坐する者を指て誓ふあり。
 噫なんぢら禍なるかな、偽善ある學者とパリサイの人よ、蓋なんぢら
 薄荷、茴香、馬芹の十分の一を取納て、律法の最も重き義と仁と信とを
 爾曹の廢、これ行ふ可もの也、かれも亦廢べからざる者なり、替者なる
 相者、爾曹の蠅を漣出して、駱駝を呑もの也、あゝ禍なるかな、偽善あ
 る學者とパリサイの人よ、爾曹杯と盤の外を潔して、内には貪欲と淫

欲とを充せり、替者あるパリサイの人よ、爾曹まづ杯と盤の内を潔せ
 よ、然バその外も亦さよまるべし。
 噫なんぢら禍なる哉、偽善なる學者とパリサイの人よ、爾曹の白く塗
 たる墓に似たり、外の美しく見れども、内の骸骨と諸の汚穢にて充、此
 の如く爾曹も、また外の義く人に見れども、内は偽善と不法にて充、噫
 さんぢら禍あるか、偽善なる學者とパリサイの人よ、爾曹預言者の
 墓をたて、義人の碑を飾れり、又いふ我儕もし先祖の時にあらば、預言
 者の血を流すことに與せざりしをと、然バ爾曹の預言者を殺し者の
 裔あることを自ら證す、なんぢら先祖の量を充せ、蛇虺の類よ、爾曹い
 かで地獄の刑罰を免れんや、是故よ、我爾曹に預言者と智者と學者を
 遣さん、或の之を殺し、又十字架に釘、或の其會堂にて之を鞭ち、或の
 邑より邑へ逐苦めん、そは義なるアベルの血より、殿と祭の壇の間よ

て爾曹が殺殺^{ころし}テラギアの子ザカリアの血に至るまで、地に流したる
 義人の血の、凡て爾曹に報來らんが爲なり。われ誠^{まこと}に爾曹に告ん、此事
 み亦此代に報來るべし。噫、エルサレムよ、エルサレムよ、預言者を殺し
 爾に遺さる、者を石にて撃つものよ、母鶏の雛を翼の下に集る如く、我
 なんぢの赤子を集んとせしこと、幾次ぞや。然と爾曹の好ざりき。視よ
 爾曹の家の荒地となりて遺れん。われ爾曹よ告ん、主の名に託て來る
 者の福なりと、爾曹の云んとき至るまでの、今より我を見ざるべし。
 已して耶蘇の殿より出るや、其弟子の皆な田舎の賤しきものよして
 四十年の星霜を経て落成せる程の廣大なる神殿に驚きたれば、殿に指
 さして、耶蘇をして其結構を觀せしめんとせしかば、耶蘇之に教へて曰
 く「爾曹すべて此等を見ざるか。我まことよ爾曹に告ん、此處に一の石も
 石の上に圯れずしての遺らじ」と云へり。此預言の後年事實とあり、エル

サレムの遂に亡ぶしかば、弟子の中私かに耶蘇に問ふに、何の時此の事
 あるべきか、世の末の兆の如何なるものかを以てするものあり、耶蘇之
 に答へて曰く、

爾曹人に欺かれざるや、慎よ、蓋はくの人わが名を冒きたり、我の
 キリストなりと云て多の人を欺くべし。又なんぢら戦と戦の風聲を
 きかん、然と慎んで懼るゝ勿れ、此等の事の皆ある可なり、然ども末期の
 未だ至らず、民おこりて民をせめ、國の國をせめ、饑饉疫病地震ところ
 くに有ならん、是みな禍の始なり。其とき人なんぢらを患難に付し
 爾曹を殺すべし。又なんぢら我名の爲に萬民に憎れん。此とき許多の
 もの礙かつ互に付し互に憾むべし。また偽預言者はく起て多の人
 を欺かん。また不法みつるに因て、多の人の愛情ひやくかゝ爲るべし
 然と終まで忍ぶ者の救ふことを得ん。また天國の此福音を萬民よ

證せん爲に普く天下に宣傳られん、然るのち末期いたるべし。是故に預言者ダニエルに託て言れたる所の殘暴にくむべきもの聖處に立を見ん。厥時ニマヤヤをる者の山に遁れよ。屋上は在もの其家の物を取んとて下る勿れ。田にをる者の其衣を取んとて歸る勿れ。其日に孕める者と乳を飲する婦の禍なる哉。爾曹冬または安息日よ逃ることを免れん爲に祈れ。其とき大なる患難あり、此の如き患難の世の始より今に至るまで有ざりき。又後にも有じ。若その日を少くせられずバ一人だに救る者なからん。然と選れし者の爲に其日の少くせらるべし。其時もしキリスト此處にあり、彼處にありと爾曹にいふ者あるとも信する勿れ。その偽キリスト偽預言者たち起て、大なる休徴と異能を行ひ選れたる者をも欺くことを得、之を欺く可れバ也。われ預じめ爾曹に之を告。若キリスト野に在といふ者あるも出る勿れ

室に在と云もの有とも信する勿れ。その電の東より出て西にまで閃くが如く、人の子も來るべけれバ也。それ屍のある處への懸あつたらん。此等の日の患難の後たち日に日の晦く、月の光を失ひ、星の空よりおち、天の勢ひ震ふべし。其とき人の子の光天に現る。また地上にある諸族は悲哀み、且人の子の權威と大ある榮光をもて、天の雲に乗來るを見ん。又その使等を遣し、筵の太ある聲を出しめて、天の此極より彼極まで四方より其選れし者を集むべし。夫なんぢら無花果樹に由て、譬を學べ、其枝すでに柔かにして葉萌めバ夏の近きを知。此の如く、爾曹も凡て此等の事を見ん、時ちかく門口は至ると知。われ誠に爾曹に告ん、此等の事ごとく成まで此民の廢さるべし。天地の廢ん然と我言の廢じ。その日その時を知のもの、唯わが父のみ、天の使者も誰もえざる者なし。ノアの時の如く、人の子の來

るも亦然らん。その洪水の前ノア方舟にいる日まで、人々飲食嫁娶
 亦として、洪水の來り悉く之を滅すまで知ざりき。此の如く人の子も
 亦きたらん。其とき二人田は在んに、一人の取れ一人の遺さるべし。二
 人の婦磨ひき居んに、一人はとられ一人は遺さるべし。是故に爾曹の
 主、いづれの時きたるかを知されば、怠らずして守れ。爾曹これを知も
 し家の主人ぬすびと何の時きたるかを知ば、其家を守て破らすまじ
 然と爾曹もまた預備せよ。意ざる時よ人の子きたらんと爲ばなり。時
 に及で糧を彼等に予さする爲に、主人がその僕等の上に立たる忠義
 よして智僕の誰ある乎。その主人の來らん時、かくの如く勤るを見る
 よ僕ノ福なり。我まことに爾曹に告ん、其所有をみさ彼よ督らすべし
 若その惡僕おのが心に我が主人の來るの遅らんと意ひ、その朋輩を
 打擡きて酒に酔たる者どもと共に飲食し始なば、その僕の主人おも

のざるの日しらざるの時に來りて之を斬殺し、其報を偽善者と同う
 すべし。其處よて哀哭切齒すること有ん。

其とき天國の燈を執て新郎を迎へ出る、十人の童女に比ぶべし。その
 中の五人の智く五人の愚あり。愚ある者は其燈をとるに油を携へざ
 りしが、智き者の其燈と兼に油を器よ携へたり。新郎おそかりければ
 皆假寐して眠れり。夜半に叫びて、新郎きたりぬ。出て迎よと呼聲あ
 りければ、この童女ども、皆おきて、其燈を整へたるよ、愚なるもの智き
 者に曰ける、我儕の燈熄んとす。願くは爾曹の油を我儕に分予よ。智
 きもの答て曰けるは、我儕と爾曹とよ、恐くは足まじ。爾曹賣者に往て
 己が爲に買。かれら買んとて往しとき、新郎きたりければ、既に備たる
 者ハ之と偕よ、婚筵よ入しか。門は閉られたり。斯て後その餘の童女
 きたりて曰ける、主よ主よ、我儕の爲よ開たまへ。答て我まことよ、爾

曹に告ん、我の爾曹を知らずと曰り。然るに怠らずして守れ。爾曹その日との時を知らざれば也。

また天國の或人の旅行せんとして、其僕をよび、所有を彼等に預るが如し。各人の智慧に従ひて、或者よの銀五千、或者よの二千、或者よの一千を予へおき、直に旅行せり。五千の銀を受し者の往て之を貿易し、他に五千を得たり。二千を受し者も、また他よ二千を得たり。然るよ一千を受し者の往て地を掘その主の金を藏せり。歴久て後その僕等の主かへりて、彼等と會計せしよ五千の銀を受し者、その他よ五千の銀を携來りて、主よ我に五千の銀を預しが、他に五千の銀を儲たりと曰ければ、主かれに曰ける、あゝ善かつ忠ある僕ぞ、爾寡なる事よ忠あり我あんぢよ多きものを督らせん、爾の主人の歡樂に入よ。二千の銀を受し者きたりて、主よ我よ二千の銀を預しが、他に二千の銀を儲たり

と曰ければ、主かれに曰ける、あゝ善且忠なる僕ぞ、あんぢ寡なる事に忠あり、我なんぢに多きものを督らせん、爾の主人の歡樂に入よ。また一千の銀を受し者きたりて曰ける、主よ爾の主人の嚴人よて、播ざる處より稔、ちらさいる處より歛ることを我の知。故よ我懼てゆき、主の一千の銀を地よ藏し置り、今あんぢ爾の物を得たり。その主こたへて曰ける、悪かつ情れる僕ぞ、爾わが播ざる處よりかり、散さいる處より歛ることを知か。然らば我が金を兌換舖に預置べきあり、然らば我が歸たるとき本と利とを受べし。是故に彼の一千の銀を取て十千の銀ある者に予よ、それ有る者の予られて尙あまりあり、無有者よその有る物をも奪るゝ也。無益なる僕を外の幽暗に逐やれ、其處にて哀哭切齒するること有ん。

人の子おのれの榮光をもて、諸の聖使を率來る時は、その榮光の位に

坐し。萬國の民をその前に集め羊を牧者の綿羊と山羊とを別が如く
 彼等を別ち綿羊をその右に、山羊をその左に置べし。斯て王その右よ
 をる者に云ん、吾父に惠るる者よ、來りて創世より以來なんぢらの爲
 備られたる國を嗣蓋なんぢら我が飢し時われも食せ、渴しとき我
 に飲せ、旅せし時われを宿らせ、裸ありし時われも衣せ、病しとき我を
 みまひ、獄に在しとき我も就ればなり。是に於て義者かれに答て云ん
 主よ何時なんぢの飢たるを見て食せ、また渴たるも飲し乎。何時主
 の旅したるを見て宿らせ、又裸なるに衣しや。何時主の病また獄に在
 を見て爾に至りし乎。王これへて彼等に曰ん、我まことに爾曹に告ん
 既よ爾曹わが此兄弟の最微者の一人に行へるの、即ち我も行しなり
 遂にまた左にをる者に曰ん、罰せらるべき者よ、我を離れて悪魔と、其
 使者の爲に備たる熄ざる火に入よ。蓋なんぢら我が飢し時、われに食

せず、渴しとき我に飲せず、旅せし時われを宿らせず、裸なりし時われ
 も衣ず、病また獄に在し時われを顧ざれば也。是に於て彼等また答て
 曰ん、主よ何時なんぢの飢、また渴また旅し、又裸また病また獄に在を
 見て主に事ざりし乎。其とき王これへて彼等にいひ、我まことに爾
 曹よ告ん、此最微者の一人に行ひざるの、即ち我に行ひざりし也。此等
 の者の窮なき刑罰にいり、義者の窮なき生命よ入るべし。
 此くて其説教を終るや、其弟子に告げて曰く、二日の後は逾越の節ある
 の汝等の知るごとし。それ人の子は十字架よ釘られん爲め賣らるべし
 と。此時は則ち祭司の長、民の長老等、祭司の長の一人カヤバの家よ會し
 て、詭計を以て耶蘇を執へて殺さんことを議しつゝ、ありし時なりき。彼
 等の其詭計の施しがたきに窮したりしに、幸なる哉、十二使徒の一人な
 る、イスカリヲテのユダが、自ら祭司の長を訪ふて、金を以て耶蘇の身を

賣らんことを申込むるに會ふや、遂に三十金を以て之を買はんことを約す。これ實に驚くべきこと、云ひざるべからず。それユダが耶蘇に従ふもの已に三年、其愛に浴し、其力も服し、其靈に化せられ、萬人の中より撰ばれて、使徒となりしもの也。然るに尋常の者すら爲ざる所を忍んで爲し、其主を賣らんと欲するに至りしもの、果して何の故ぞ。彼れもし耶蘇も服せざる乎。何ぞ今に及んで其勢力の頂上も達したる時に於て之を賣るの要あらんや。彼れもし三十金も迷ひし乎、三十金の當時一奴隷賣買の金として、決して之に迷ふほどの金にあらざる也。彼れ若し他の使徒よりも多く地上の天國を望みて、耶蘇に失望したる乎。何ぞ今も及んで特さらに失望するを要せんや。之より先き、耶蘇の欺ばく、彼の國は此世もあらざるを説きしにあらすや。況や、今の萬民耶蘇に熱するのと狂するが如く、或は一擧して地上の天國を打ち建ること難きにあらざるほどなるをや。此の如く利害よりするも、變心するも、何れの點より觀察するも、ユダの舉動の解すべからざる一大不可思議と云はざるべからず。唯一解釋するに足るかと思へる、もの、彼が地上の天國を打ち建てんとして、急ぎたるべしとの事是れ也。彼れ思らく、耶蘇自ら天國の此世にあらすを爲すも、彼の奇蹟と異能と、聲望と、彼の如くそれ大也。若し外より之を擁するも、會ひ、何ぞ地上の天國を建ること難しと云ふべけんや。故に法教師等が彼を求むるに乗じて、之を賣らば、彼の之を防がんと、必らず其力を表はして、遂に地上の天國を打建つるに至らん。是れこれを苦しめて、之を崇むる也。彼の心事或は此の如くなりしならん歟。(ニヤン下ル基督傳)

已にして除酵節の首の日、耶蘇其十二弟子と共にエルサレムに住する弟子の家、於て晚餐を食せんとするや、席を起て上衣をぬぎ手巾を

腰に束ね而して盤に水を入れ、弟子の足を洗ひ、その束たる手巾にて拭
 のじめ、遂にペテロに及ぶ。ペテロ之を難つて曰く、主よ爾わが足を濯
 か。耶蘇答て曰く、我爲ことを爾いま知す、後これを知べしと。ペテロの耶
 蘇をして己の足を洗ひしむるの、恐惶の至に堪へずして之を謝して曰
 く、爾斷て我足を濯ふべからずと。已にして耶蘇が、若しわれ爾を濯すべ
 爾の我と干渉なしと云ふや。ペテロの更らに、主よ止よ我足のみあらず
 手と首とも濯たまへと云へり。かくて耶蘇已に彼等の足を濯し、後、その
 上衣をとり、また坐て彼等に曰ける、我がなんぢらに行しことを知る
 か。爾曹われを師と呼び、また主と呼ぶ。なんぢらの言ところの宜し。われ
 の誠に是なり。我の爾曹の師、また主あるも、尚なんぢらの足を濯ふ。爾曹
 もまたたがひに足を濯ふべし。我なんぢらに例を示せり、此の我なんぢ
 らに行し如く、爾曹にも行しめんがためあり。われ誠に實に爾曹に告ん

僕、其主より大ならず、又使者の之を遣す者より大ならず。爾曹もし之
 を知て此の如く行ハ福なり』と此の時、耶蘇早くもユダの舉動よりて
 其異心あらんことを察し、告げて曰く、我まことに爾曹に告げん。爾曹の
 うち一人われを賣なり。彼等いたく憂て、各々耶蘇に曰ける、主よ我あ
 る乎。此時ユダが手を盂につけたるを見て、耶蘇の答て曰く、『我と偕に手
 を盂に着る者の、即ち我を賣す者なり。人の子の己について録されたる
 如く逝ん。然ど人の子を賣す者の禍ある哉。その人生れざりしならん、反
 て幸なりしあらん』と。ユダ答て曰く、ラビ我なるや。耶蘇曰く、爾の言る如
 しと。今や己を賣るもの目前にあれども、死の已よ心に決せられたれば
 耶蘇の泰然として騒がず。食する時、パンを取りて祝し、之をさき弟子に
 予へて曰く、『取て食へこれの我身あり』また杯を取て謝し、彼等に予て曰
 く、『爾曹みち此杯より飲め、これ新約の我血にして罪を赦さんとて衆の

人の爲に流す所のもの也。われ爾曹に告ん、今より後、なんぢらと偕し新しき物を吾父の國に飲まん日までの、再びこの葡萄にて造れる物を飲まじ』と。已にしてユダの出来るや、耶蘇また弟子に告げて曰く、『今人の子榮をうく神また彼に因て榮を受るなり。神もし彼に因て榮を受る時の神も亦みづから榮の中に、彼を榮しむ直に彼を榮しめん。小子よ、我なは片時なんぢらと偕しあり、爾曹われを尋ん、我ゆく所は爾曹に至ること能じ。前に之をユダヤ人にいふ。今また之を爾曹に告ぐ。われ新しき誠を爾曹に予ふ。則ち爾曹相愛すべし。このこと是なり。我なんぢらを愛する如く、爾曹も相愛すべし。爾曹もし相愛せば、之は因て、人々爾曹の我弟子なることを知るべし』と。汝等相愛すべし、これ耶蘇の新しき誠也。此の誠の中に凡てのものは含まれたり、新しき誠已に出づ。古き十誠の已に此の新しき誠の前に溶解して滅する也。

第十二

最後の訣別 ○ゲスセマ子の所 ○捕吏來る ○ペテロ劍を抜

く ○耶蘇訊問せらる ○ピラト死刑を離す ○逆待の後、謀殺せらる ○陸 ○傳道の命令 ○天國遂に來る。

已にして、彼等晚餐を終り、相共に歌を謳ふて、橄欖山に上りしが、耶蘇彼等よ云つて曰く、今夜汝等皆な、我に就きて眠かん。蓋し我牧畜者を撃てば、群の綿羊ちらんと録されれば也。然れど我甦りし後、汝等よ先ちてガリラヤに往くべしと。耶蘇の使徒の熱心を知らざるにあらず、然れども彼等の耶蘇あるが故に、耶蘇を信するものにして、誠は危急存亡の場合とありては、人心の微弱ある、必らず反覆すべきを知らず也。其時ペテロ、耶蘇に告げて曰く、皆あ汝に礙くとも、我の礙かじと。耶蘇押返して曰く、否、今夜鶏の鳴かざる中に、汝三たび我を知らずと云ふんと。死の已に近けり、捕手の來らんと近し。此に至て、耶蘇の身を以てす

るも、悲歎遣る瀬なきを免れず。彼は死を恐るゝものよあらず。然れども其愛せる弟子と、人類とを捨て、去るの、其耐ざる所也。此に於てか、愁然として最後の訣別を爲して曰く「なんぢら心に憂ること勿れ、神を信じ亦われを信すべし。わが父の家への第宅おほし、然すば我預て爾曹よ之を告べきあり。我なんぢらの爲に所を備へ、往く。もし往て我なんぢらの爲に所を備へ、又きたりて爾曹を我に納べし。我をる所に爾曹をも居しめんとて也。爾曹わが往所を知、また其途を知」トマス曰ける「主よ我儕なんぢの往所を知らず、何にして其途を知らんや。耶穌答て曰けるは「我の途なり、眞あり、生命なり。人もし我よ由されば父の所に往くこと能す。若なんぢら我を識ば我父をも識べし。今より爾曹かれを識あり。已に爾曹彼を見たり」ピリポ言つて曰く「主よ我儕に父を示し給へ然ば足り」耶穌答て曰く「ピリポよ我かく久く爾曹と偕ふ在しよ未だ我を識ざるか、我を見し

者の父を見しなり。何ぞ父を我儕に示せと言や。われ父にをり父の我よ在ことを信せざる乎。われ爾曹に語し言ひ、自ら語しに非ず、我よをる父その行をなせる也。我の父よをり父われに在と我つけし言を信せよ。若信せずば我事に因て之を信すべし。誠に實に爾曹よ告ん我を信する者の我行ところの事を行ん、且此より大なる事を行べし、蓋われ我父へ往ばなり。爾曹すべて我名よ託て求ふ所のことの我すべて之を行ん、父の榮の子に因て顯れんが爲なり。若なんぢら何事にても我名よ託て求ひ我これを行ん。若なんぢら我を愛するあらば我誠を守れ、われ父に求ん、父かならず別は慰る者を爾曹に賜て、窮なく爾曹と偕ふ在しむべし。此の即ち眞理の靈あり、世これを接ること能す。蓋これを見ず且しらざるに因されど、爾曹の之を識、その彼なんぢらと偕に在かつ、爾曹の衷に在ばなり。我なんぢらを捨て、孤子とせず、再なんぢらに就ん。暫せば世わ

れを見ことなし、然ど爾曹の我を見、われ生れば爾曹も生ん。その日に爾曹われ吾父、在、かんぢら我に在、われ、爾曹も在、ことを知べし。我誠を有ちて之を守る者、即ち我を愛する者あり。我を愛する者、我父に愛せらる、我も亦これを愛して彼に自己を示すべし。』

其言何ぞ愁然として、涙と共に出るが如くなるや。之を聴く弟子、固より勝九回するが如きものありし、あらん。千歳の下、之を讀みて泣かざらんと欲するも、得べからざる也。死の刻々に近き來れり。彼の泰然として然れども、愁然として、之は向へり。彼れ弟子を率ひて、グスマチの花園に入りしが、愛ひ悲みを催して、彼等に云つて曰く、我心いたく愛て死るばかり也。こゝに待て、我と偕し目を醒しをれ。と少しく進往て、ひれふし祈いひける。『我父よ、若しかあへば、此杯を我より離ち給へ。然ど我心の従を成んとするにあらず、聖旨に任せ給へ』と。而して弟子も來り其癡た

るを見て、ペテロも曰ける。『如此一時も我と偕に、目を醒しをること能はざる乎』。三次ゆきて復いのり曰ける。『吾父よ、若しわれに此杯を飲さで、離つこと能はずば、聖旨も任せ給へ』と。來りて又弟子等の癡たるを見、『これ彼等の目疲たる也』と。彼等を離れて又たゆき第三次も同じ言をもて祈りしが、其汗の血の滴の如く、地も下ちたりき。此くて遂に其弟子に來りて曰ける。『今の癡て休め、時の近し。人の子、罪人の手も付されん。起よ我儕往べし。我を賣す者近きたり』と。其死も臨みて、一點の怒心なく、一點の畏心なし。唯だ悲しむ所の愛するものを去るの一事也。然かも「ストイツク」派の如く、克己自制して、死も臨むにあらず。慈眼愛賜、民の不幸を救ふを思ふて、己を顧みるの暇なく、而して死の杯を飲む、上帝の命たるを知て之も服する也。嗚呼、これ誠に彼の放縱あるルウツウをして、ツラテスの死、若し聖ならば、耶蘇の死、即ち神なりと云ひしめたる所

以也。

已にして一隊の兵卒と、下吏、ユダに導かれ、炬と、挑灯と、兵器を携へて此
 よ来るや。耶蘇出で、彼等に云つて曰く、誰を尋るか。彼等こたへけるの
 ナザレの耶蘇ありと。耶蘇之を聞きて『我はそれ也』といふや、かれら退き
 て、地に仆たり。耶蘇重ねて曰く『我すでは爾曹に、我の其なりと曰へり。若
 しわれを尋るならば、此輩を容て去しめよ』と。時よペテロ、劔を佩たりし
 が耶蘇の正に捕へられんとするを見て、憤然として進み劔を抜き、祭
 司の長の僕を撃て、其右の耳を削おとせり。耶蘇首を回らして之を制し
 て曰く『爾の劔を故處に收よ。凡て劔をとる者の劔にて亡ぶべし。我いま
 十二軍の天使を我父に請て受ること能はずと、爾曹おもふ乎』と。然り誠
 に彼よして、力を以て争はんとせば、彼豈に術なからんや。然れども彼の
 此に死を決するを以て、上帝の命ありと信せり。此に死することの萬民

を救ふ也と信せり。彼の斬られたる敵の僕、マルユスの耳は捫りて、之を
 醫し、また兵隊の長よ云つて曰く『爾曹刃と棒とを持來り、強盜に當るが
 如する乎。われ日々に爾曹と偕に殿に在し時の、我よ手を措くこと無りき
 然るよ今の爾曹の時、かつ黑暗の勢勝てバ也』と。従容として縛に就く。而
 して弟子の皆な逃げ去りぬ。これ正月十四日の夜のことありき。
 此く兵卒等の耶蘇を捕へて、祭司の長カヤバの家に行けり、カヤバの家
 の、學者、長老等の集議所也。彼等耶蘇を何の罪に陥れんかと相議せしが
 之を陥るべき確固たる證據なきに窮したり。此る中に、保守黨の流を汲
 むもの、中より、多く耶蘇の爾かゞの言を放りなど、訴へ出るもの
 ありと雖も、皆な確實からざりしが、其の中二人の證人出で、曰く、この
 人曩に言ることあり、曰く我よく神の殿を毀ちて、三日の内に之を建
 うべしと。此に於て祭司の長たちて、耶蘇に云つて曰く、爾こたふる言なき